アカネ色の魔王

yuzuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アカネ色の魔王

【Ｎコード】
Ｎ３９４６Ｕ

【作者名】
ｙｕｚｕｋｉ

【あらすじ】
魔法の力が失われたこの世界に、一つだけ残された魔法学術研究機関『エリュクフィル魔法学校』。
エーテル魔法元素を研究するアカネ・スクウォードは、学校の裏山で一匹の白い獣と出会った。その獣は、白鴒獣（はくれいじゅう）と呼ばれる絶滅したはずの魔物だった。
アカネに懐いてしまい飼うことになってしまった白鴒獣、『キララ』と名付けられたその小さな魔物には、人間達も知らない大きな秘密があった。

プロローグ

学校裏の森の中で、その生き物を見つけた。
美しい生き物だと思った。リスより大きくヤマネコより小さい、ウサギのように耳の尖った小さな獣。ミルミギアでもこんな生き物見たことない。遠目には白い花のようにも見えた美しい毛並み。花を濁らせるこの長雨は、さながら卯の花腐しの五月雨のよう。
弱々しく睨みつける深紅の瞳には、彼女の姿は敵として映っているのだろうか。
ケガをしているようだった。見ると、右後ろ足から背中にかけて血に汚れている。その獣は小さな体を精一杯大きく伸ばして、荒い息を吐いて威嚇している。
「大丈夫、だから……」
雨が強くなる前に寮へ戻りたかった。でも、この子を放っておくことはできない。優しく声をかけて、ゆっくりと手を伸ばす。白い獣は脅えていた。
手を止めて見つめ合って、しばらく根競べ。
サーっという静かな雨は、彼女の伸ばした掌に小さな水滴を作り始めた。雨が少し強くなってきたのかもしれない。雫は手を伝い、彼女の袖を濡らしていく。
どれほどの間見つめ合っていただろうか。
白い獣のピンと張った耳は徐々に力をなくし、全身を覆っていた緊張はゆっくりと和らいでいった。先に根負けしたのは白い獣の方だった。
彼女はホッと一息ついた。
この子を連れて、とりあえず雨のあたらない所へ移動しよう。
そう考え彼女が動こうとした時、後ろの茂みがカサリと音を立てた。
葉についた雨の雫が落ちた、そう思った。しかし、目の前の獣は

ピンと耳を立て、再び警戒心を張り巡らせている。彼女の方は見ようともせず、ただジッとその茂みを見つめている。
彼女は振り返った。
その瞬間、茂みからは黒い大きな影が飛び出した。
「危ない！」
白い獣を庇って地面に転がった。
黒い影は、灰色の深い毛に覆われた大きな獣だった。捕らえ損なった獲物を見つめて、グルルと咽を鳴らしている。
彼女はこの獣のことを知っていた。
「アッシュウルフが、どうしてこんなところに……」
この狼は森のもっと奥を縄張りにしている。こんな森の外近くに現れるなんて聞いたことがない。
彼女は腰に持っていたナイフに手を伸ばした。野草を取ろうとして持っていたもの。もっと森の奥へ行くのであれば、火をおこす道具やアッシュウルフ達の嫌いな匂いを出す獣除けなどの道具も持って行くが、今はそういった物も持っていない。
慌てて身を起こすと、ナイフを構えてアッシュウルフと対峙する。もう片方の手で、胸の中の白い獣を庇う。
「ここはあなた達の縄張りではないわ。森の奥へ、帰りなさい」
アッシュウルフは白い獣を狙っていた。白い獣を追って、こんな所までやってきてしまったのだろうか。
先ほど庇った時にケガをしたのだろうか、ナイフを構えた手からは赤い血が雨水に混じってポタポタと垂れている。血の匂いを感じ取って、アッシュウルフは興奮しているようだった。
なんとか逃げられないだろうか……。
彼女は必死に考えていた。このままでは、自分もアッシュウルフもただでは済みそうにない。
その時、白い獣が彼女の胸から飛び出し、彼女とアッシュウルフの間に立ちはだかった。彼女を守るようにして、狼を威嚇している。
白い獣は深い紅の瞳を爛々と輝かせて、アッシュウルフを睨みつ

けていた。先ほどまでの脅えた様子はなかった。まるで、守るべきお姫様を見つけた、目覚めた勇者のように。
二匹の獣は睨み合う。
しかし、アッシュウルフが何かに気がついた様子を見せると、突如脅えたように身を引き始めた。白い獣は微動だにせず睨み続けた。相変わらず雨は降り続け、風は少し寒気を増したように感じる。
アッシュウルフが何に脅えているのかわからなかった。
しばらくして、アッシュウルフは彼女達の前から姿を消した。
アッシュウルフの気配が十分になくなった頃、白い獣はゆっくりとこちらを振り返った。しかし、その瞳に映るのは、安堵ではなく戸惑い。僅かな警戒の色を残して、彼女をジッと見つめている。
彼女は慌ててナイフを降ろした。
どうしてアッシュウルフが去ったのかわからない。
でも、これだけはわかった。
「助けるつもりが、逆に助けてもらっちゃったね……」
微笑みを向けると、ようやくその白い獣は緊張を解いたようだった。
近寄ってきた命の恩人を抱き上げると、彼女はその場を後にした。

まだ日が出ている時間なのに、辺りはもう暗くなっていた。雲は厚くなり、降っていた雨はより強くなって森の草木を打ち据える。
学校の裏門、雨のあたらない壁際に腰掛け、彼女は傷口の止血をしていた。ケガをした右手の甲を左手で押さえる。幸いかすり傷だったので、しばらくすれば血も止まるだろう。
止血には持っていたハンカチを使った。井戸から汲んできた水で傷口をきれいに洗うと、白い獣の方にはハンカチをナイフで切って包帯の代わりとした。こちらも傷は浅かったようで、彼女が看た時にはもう血は止まっていた。

先に治療の終えた獣は、嬉しそうに彼女の周りを動き回った後、ついさっきから姿を消している。
彼女は傷口をハンカチで押さえながら、静かに森と空を見つめていた。
微かな足音が聞こえ、彼女が横を向くとそこには草を咥えた白い獣がいた。彼女のもとまで歩いてくると、その草を彼女の目の前に置く。
その草は、血止めに使うことのできる薬草だった。
「まぁ、これを使えって言うのね」
その獣が頷いたように見えた。
「ありがとう」
とても賢い生き物だと思った。昔の人はこれを止血の薬草に使っていたし、彼女は祖母からもその応急処置のやり方を教えてもらったことがある。森の動物達も、これを止血に使っているのだろうか。
「でも……ごめんね。その薬草は治療には使えないの」
本能でわかっていたのだろうか。人間の見よう見まねで覚えたのだろうか。確かにこの薬草の成分には、血を固めて止血を促す成分が含まれている。
しかし、
「この薬草をこのままでは、止血の効果は薄いの。傷口から雑菌が入ってしまうこともあるから、このくらいの傷ならかえって使わない方がいいの」
先人の知恵とは、とても素晴らしいもの。しかし、その全てが全て正しいというものではない。
「私達生き物にはね、自分で傷を癒そうとする力があるから、その力を使ってやればいいのよ。さっきまで血の出ていた傷口も……ほら、押さえているだけで血は止まる」
素人が下手に治療するよりも、自然の力に任せた方が良い。手の甲の傷は、ほとんど血が止まっていた。
彼女の言葉を理解しているのか、白い獣は残念そうに肩を落とし

た。
その様子に彼女はなんだかおかしくなってしまった。
「この薬草は止血に使うよりも、お茶にする方がおいしいのよ。後で使わせてもらうね」
彼女は薬草を手に取った。この薬草は香草として料理にも使われるもので、独特の香りが伝わってくる。
白い獣はふてくされたように、彼女の膝の上を陣取って丸くなった。
「本当はね、この薬草を使って、昔の人達は魔法を使うことができたらしいの」
獣がピクリと体を動かした。
見ると、小さな口をめいっぱい開いて大欠伸をしている。可愛らしい口からは、肉食獣を思わせる小さな犬歯が見えた。
「でも、今の私達には魔法は使えない。科学を使ってそれの真似事はできるけど、呪文を唱えるだけで火をおこすことや雨を降らせることはできないわ」
魔法とは、もはや失われた力だった。本当にそんな力があったのかどうかさえ、今を生きる彼女達にはわからない。ただの伝説だったのかもしれない。
彼女は上を見上げた。高い壁の向こうには、大きな城のような建物がある。この学校は、かつてのエリュクフィル城だったもの。数十年前に城を改装し、国の指定重要文化財であるその大きな建物は、現在は学校として使用されている。
「それなのに、私の通うこの学校はエリュクフィル魔法学校と呼ばれている。本当に魔法が使える人なんて一人もいないのに、おかしな話だよね……」
独り言のように呟きながら、彼女は膝の上の獣の頭を優しく撫で続けた。
「おまえもそろそろ、森の奥へ帰りなさいね」

そう言って、彼女はお城へと戻っていった。
白い獣は取り残された。
だが、森へ戻ることはなかった。
彼女は知らなかった。
その生き物は、ヒトと変わらない高い知能を持っていた。
彼女は気付いていなかった。
この白い獣は、並の男達と変わらない、とても執念深い性格であった。
彼は迷った。
人間はとても恐い生き物だということを知っている。昔からそう聞かされ続けてきた。人間達に見つかり、絶滅寸前にまで追いやられたことも遠い過去の話ではない。
しかし、彼女が見えなくなって、彼は慌てて結論を下した。
?このまま逃がしてたまるもんかっ！？
気に入った相手を見つけたなら、なりふりかまわず積極的にアプローチしていかなければならない。黙って見ているだけではいけない。恋は人間であっても他の動物達であっても、何も変わることはない。
?待ってろよ、マイハニ〜！？
白い獣は彼女の後を追った。

1－（1）　赤い髪の少女と白い魔物

「……で、この子はついてきちゃったわけだ」
机の上の動物を見ながら、彼女の同室の友人、ミルは話した。
「それでアカネ、どうするの？」
問いかけられて、その白い獣を連れてきてしまった本人であるアカネは、ため息交じりに呟いた。
「どうしよう……」
学校の裏から戻ってくる途中、寮の入り口で気が付いた。通り過ぎた女の子達が何やら小声で騒いでいる。後ろを振り返って、この獣を見つけた時は本当に驚いた。上着で隠して、慌てて部屋へと連れてきた。
このエリュクフィル魔法学校付属女子寮では、ペットを飼うことは禁止されている。
濡れた制服から私服に着替え、アカネは肩にかかる髪をタオルで拭いた。アカネの髪は茶というよりも朱に近い赤色だった。瞳の色も同じ色。エリュクフィルでは珍しい、母を思い出す優しい赤い色。
「手の傷は大丈夫？」
鏡を見てボーっとしていたアカネに向って、ミルが心配そうに尋ねた。手の傷には、先ほど部屋に戻ってすぐに、ミルが寮長さんからもらってきてくれた包帯を巻いている。
「うん、大丈夫。血はもう止まってるし、さっき消毒もしておいたから」
痛みは少し残っているが、ペンを持つにも差し障りはない。
白い毛の獣の方は、ハンカチを包帯に代えようとしたらとても嫌がったのでそのままにしてあった。まだ痛みが残っていて、触られるのが嫌なのだろう。それとも、ハンカチが気に入っただけなのか。
ミルは机の上の白い生き物を見ながらアカネに聞いた。

「それで、この子はもう一度捨ててくるの？」
「それはさっきやった。捨てて……というより、学校の外まで連れていったのだけど、結局また付いてきてしまったの」
　このままでは埒が明かないと思い、結局寮の部屋まで連れてきてしまった。
「食べ物やったわけでもないのに、なんで付いてきたんだろう……」
　ネコなどの場合、一度エサをやるとそのことを覚えてしまい、以後そこに住み着いてエサをねだるというようなことがある。アカネも昔、実家の裏でヤマネコにエサをあげたところそれ以来住み着いてしまい、そのヤマネコは今でも我が家で寝起きしている。
「恩感じて、何かお返ししようとしてるんじゃないの？　この子、けっこう頭いいみたいだし」
　気楽にミルは言う。それはアカネも同感だった。この生き物は非常に頭が良いと思う。だったら、余計な手間をかけさせないでほしいとも思った。
　珍しい動物であれば売られることもあるし、捕まって処分されることもある。こんなに白くてきれいな毛並みの生き物、何かしら良からぬ事を考える人間がいても不思議ではない。他の生徒達に捕まれば、見世物にされてしまうだろう。
「心配なら、首輪でも着けてあげれば？　飼いネコなら一応誰も手出しはしてこないと思う」
「この子を飼うつもりはないよ」
「諦めて飼ってあげれば？　おいしい食べ物もらって、この場所も覚えたみたいだし」
　きっと外に逃がしてもこの子はまたこの部屋にやってくるよ、ミルは机の上で一心不乱にクッキーを食べている白い動物を指差しながら言う。
「餌付けしたのは、ミルでしょ」
「……いや、だって、そうでもしないとあたしには懐いてくれそうになかったし」

最初、この獣はミルの姿を見て当然のように威嚇していた。しかし、ミルが持っていたクッキーを差し出すと、手のひらを返したように馴れ馴れしくなった。
「やっぱ第一印象ってのが一番大事だよね、うん」
「そのおかげで、この子は完全に帰る気をなくしたみたいだけど」
「変わった動物だよね～。なんていう名前の生き物なの？」
「知らない。こんな生き物、今まで見たことも聞いたこともない。生物分類学の教科書に載ってなかったから、後で図書館に行って調べてみないと」
「物知りなアカネでも、知らないことがあるんだね」
「別に、私は……」
謙遜してアカネは言葉を濁した。
「私はミルと違って田舎育ちだから。雑学が多いだけだよ」
アカネの実家があるミルミギアは、エリュクフィルとは比べ物にならないほどの田舎だった。人よりも家畜や動物達の方が多い、そんな山の中の小さな村。大陸の流行が最後に辿り着く南の終着点。そこで育ったアカネには、都会育ちのミルにはないたくさんの知識を持っている。
「それに、私はただの世間知らずだから……」
外で取ってきた薬草でお茶を入れたりと、そんな知識は豊富だが、街のことはここに引っ越してくるまで何も知らなかった。だから、そこは反対にミルから都会での生活知識を教えてもらっている。
この学校の寮にやってきて2年と少し。ようやく街での生活に慣れてきたところ。
「アカネ、この子に名前つけないの？」
「名前つけちゃうと、かえって別れが辛くなるよ？」
「すぐ別れちゃうの？」
「私はそうしたいと思ってるんだけど……」
ちらりとその動物を見ると、イヤイヤと首を横に振った。
ペット禁止の寮であっても、ペットを飼おうとする生徒は何人も

いる。当然、学校の先生方に見つかればすぐに取り上げられる。
「諦めて飼ってやりなって。寮のみんなには口止めしとくからさ」
しかし、生徒に甘い寮長さんは割と寛容な目で見てくれている。ルームメイトや他の寮生達と協力すれば、卒業まで買い続けることは決して不可能ではない。今もこの寮で、ペットにネズミを飼っている生徒が一人だけいる。
「……でも、動物飼うなら、鳥籠みたいな物が必要でしょ？」
「あ、それなら大丈夫。上の階の先輩が、確か去年までリス飼ってたらしいから。頼めばその籠貸してもらえると思うよ」
籠と聞いて、その動物は嫌そうにピクリと反応してみせた。
「それに、エサとかどうするの？」
「大丈夫。寮婦さんに頼めば、残り物分けてもらえるよ。あたしもよく夜食もらってるし」
「……ミルって、そんなことしてたの？」
と、気がついて二人は、そろって机の上の白い獣を見つめた。
赤いつぶらな瞳が可愛かった。キョトンと、クッキーを抱えたまま「なになに？」と彼女達を見上げている。
「こいつって何食べるの？」
「さぁ？　犬歯があったから、私は肉食かなって思ったんだけど」
「少なくとも、クッキーとチョコとキャンディは食べるらしい」
雑食のようだった。
「ミル、お菓子ばっかりやってたら、虫歯になっちゃうよ」
「……なるの？」
「……さぁ？」
しばらく話していた二人だったが、とりあえず自分達の寮の晩御飯を食べに行くことになった。
「何かもらってきてあげるから、少し待っててね」
白い獣からの反応はなかった。
「素直に待っててくれると思う？」
「わからない。でも、普段私達は授業に出ているんだから、待つこ

とも覚えてもらわないと」
「まぁ、外から鍵をかければ、部屋は完全な密室にできるわけだけど」
大人しくしててね、そう白い獣に言い残してアカネとミルは部屋に鍵をかけ、寮の食堂へと向かった。
「部屋で動物飼うなんて、本当に大丈夫なのかしら……」
「学校の教師連中にばれなければ、まぁ大丈夫じゃない？　寮長さんは見て見ぬフリしてくれるし。部屋汚したり、他の生徒に迷惑かけなければ問題ないでしょ」
「ミルはいいの？　ひょっとすると、部屋が少し獣臭くなるかも」
「アカネ、もっと山行ってハーブ取ってきて！」
先ほど抱いた時も、それほど目立って獣の匂いは感じられなかった。
「それに、隣や上の階から、鳴き声の苦情がこないかどうか……」
とそこまで言って、二人は目を見合わせた。
「あの子って鳴くの？」
「……さぁ？」
聴いたことがない。
「狼に襲われて威嚇の音は出してたけど、それ以外では一度も鳴いてないわ」
「ふ～ん、鳴かないなら静かでいいね。心配事は一つ減ったかな」
しばらく前に子犬を飼おうとした生徒がいた。しかし、その犬はキャンキャンと高い声で鳴き続け、寮の中は大変な騒ぎとなった。飼う動物はしっかり選ばなければと、他の生徒達はいい教訓を得たものだ。
「どんな声で鳴くのかな？」
あの美しい姿からは、どんな歌声が聴こえてくるのだろうか。ミルの疑問にアカネは答えた。
「あのタイプの小動物なら、チーチーとかキーキーっていう高い鳴き声かな？」

「意外にワンワンとか鳴いたりして」
「あはは、それはおもしろいかも」
あの姿を見るかぎり、イヌやネコというよりもリスに近い生き物だと思った。
「ネコみたいに、ニャーニャー鳴くとか？　それはそれで可愛いかも」
「ネコ科ではないみたいよ？　髭もないみたいだし」
そう言うアカネに対し、ミルは得意げに話した。
「髭はあったよ」
「え、そうなの？」
「うん。白くて短いのがちびっとだけ。白いからほとんど目立ってないみたい。引っ張ったら、怒って噛みつかれた」
「それはミルが悪い」
「引っ掻くんじゃなくって噛みつくんだから、鳴き声としてはワンワンの方が有力なのかなぁ」
二人は話しながら、トレイを持って食堂の生徒達の列へと並んだ。

その獣達の集落は、エリュクフィルの街の北の森奥深くにあった。人里離れた樹海の奥、そこには人間達の知らない動物達の文化があった。
その白い生き物は、人と変わらない高い知能を持っていた。各集落をそれぞれの族長が統括し、高い生活水準を保ち、時には遊びや娯楽を楽しむことができた。木を彫りぬいて作った家があった。小さな洞窟のような家もあった。中には、木を組み立てた手作りの家というものもある。
人のように道具も使う。使えるものはなんでも使う。とはいうものの、人間ほどモノを作ったり利用したりはしない。それほど器用ではなかった。

そこには一つの社会があった。人間社会とは少し違うが、幼い子供達が集まる学校のようなものもあった。本はないが、黒板とチョークのようなものはあり、子供達に文字や算数を教えていた。

昔、彼は、族長であり学校の教師でもある祖母に聞いたことがあった。

ねぇおばあちゃん、どうしてこの森から出ちゃいけないの？

この社会において、森の外は禁忌。決してこの森から出てはいけない。年若い好奇心旺盛な彼にとって、この森での生活は単調で退屈なもの。彼はもっと外の世界を見てみたかった。

親心に子心。行くなと言われれば行きたくなってしまうもの。

しかし、祖母は言った。

？ダメよ。外の世界にはとても恐い生き物がいるの。外に行っては、あなたは殺されてしまうわ？

大丈夫だよ。俺、逃げ足早いもん。

そんな彼に、祖母は念を押して言う。

？ダメ、そんなこと言わないで。あなたがいなくなってしまっては、私が悲しいわ？

おばあちゃん子である彼としては、祖母を悲しませるようなことはしたくなかった。彼は、森の外へ遊びに行くのはもう少し控えようと思った。

おばあちゃん、恐い生き物って何？　あの灰色の狼？

あの狼なら恐くない。見つかって追われたこともあるけど、何度も逃げ切ったもの。

？いいえ。違うわ、本当に恐いのは狼達じゃない？

いつになく真剣な祖母の姿。彼は祖母の深紅の瞳がキラリと光ったような気がした。

？本当に恐ろしいのは人間達なの。ごく稀にこの森の奥まで入ってくる人達もいるけど……。いい？　人間達には、決して見つかってはダメよ？

祖母だけではない、村の大人達は口を揃えてそう話す。

今の彼には、そんな大人達の忠告が嫌と言うほど身にしみて感じられた。
?おばあちゃん、ごめんなさい。言いつけを守らなかった、ボクは悪い子です。人間は本当に恐ろしい生き物です?
人里に下りてきたことを、激しく後悔した。
?ボクは今、身売りに出されようとしています?

エリュクフィル魔法学校付属女子寮。寮の夕食も終わり和やかな雰囲気に包まれた団欒室の一角、一際華やかな賑わいを見せる人だかり、その中心に彼はいた。
彼は怯えていた。
彼を取り囲む無数の目は、さながら獲物を品定めする飢えた猛禽類の瞳。そこには知性の進化とともに忘れ去られてしまった動物としての本能が垣間見える。これほど人間とは恐ろしい生き物だったのかと、彼は愕然とする。
ガシガシ！　ガシガシ！
爪で引っ掻こうが、なけなしの小さな牙で噛みつこうが、固い鉄製の籠はビクともしない。手から伝わる無機質的な冷たさが、彼の心へと深く染みこんでいく。首に深く食い込む首輪と、それに付属された奴隷プレートは、彼の絶望そのものだ。彼は街の外れで放牧されているヒツジ達を初めて羨望した。
『キララ　３００エル』
奴隷プレートではなく、値札である。
「ねェ、ミル！　３００エルって、ちょっと高くない？」
人だかりの先頭でまじまじと彼を見つめていた女の子が、籠の隣に座るミルに言う。
「たしかに可愛いんだけど、さすがにその値段は……」
「何言ってるの？！　この美しい白銀の毛並み、愛らしいルビー色の瞳、マフラーにでもしてみたいふくよかな尻尾、小さな口から見

える申し訳程度の犬歯とか、もう最高じゃない！　これ以上まけらんないわ！」
バシバシと籠を叩きながら偉そうに胸を張るミル。
籠の中で、彼は本気で怯えていた。
「何ていう種類の動物なの？」
「知らない。調べても分かんなかった」
「何食べるの？」
「基本的に雑食。肉は生よりレアくらいに焼いた方が好みらしい。好物はチョコレート。ピーマンには拒絶反応を示す」
お菓子も食べるんだぁと、女の子にクッキーを差し出される。
？食べるけどさぁ……？
泣きながらかぶりついた。それはもう親の仇のように食べつくした。
小さな手で自分の顔よりも大きなクッキーを食べる彼の様子に、お客達はうっとりと見惚れている。
また別の女の子がミルに尋ねた。
「この子、全然鳴かないね。どんな鳴き声なの？」
「あたしも聞いたことない。静かな生き物だから、寮で飼うにはうってつけ！」
？うわぁ～ん！！？
泣いている。
「そこらのペットショップでは買えないレアな生き物だよ！　寮で飼うもよし、毛皮にするもよし、芸を仕込んでもよし！　今なら３００エルポッキリで、この籠もつけちゃう！　お買い得だよー！」
？毛皮は嫌だぁ～！！？
必死で首を横に振っている。
鳴いても叫んでも伝わらない。彼の声は人間達には聴こえない。
人間とは可聴領域が違う。声を高くしたり、低くしたり、いろいろと試してみたが、結局人間達との意思疎通手段はジェスチャーしかなかった。

籠の前に立つ、彼に釘付けの小さな女の子に視線で訴えかける。
?うるうる。お願い、可哀そうなボクを買って？
外界とを隔てる固い冷酷な鉄柵、その向こう側から差し出された女神の手に彼は飛びついた。救いの女神様の指先には、チョコレートがのっている。彼は指までしゃぶりつくした。彼女の愛らしい笑顔の向こうには後光まで見えるようだ。
「おねぇちゃ～ん！　この子買ってー！」
「ダメです、そんなお金はありません」
「一生のお願いだから！　ちゃんと世話もするからァ！」
「そう言って買ってあげたペット、この前死なせたばかりじゃないの」
その瞬間、彼の動きがビクリと止まった。
女の子の顔を恐る恐る見上げる。その無垢な笑顔が、もう悪魔の微笑みにしか見えなかった。彼の本能が、この子はヤバいと警告を鳴らしている。
?いーやーだぁーーっ！！　助けて～～～！！？
籠の反対側まで後ずさり、鉄製の柵にガリガリと爪をたてながら、誰にも届かぬ悲鳴をあげていた。
取り巻くお客達は、可愛い可愛いと声をあげながらも、なかなか手を出そうとはしない。
「ちっ。今日の客はノリが悪いわね。ねぇキララ、ちょっと芸かなんかしてくれない？」
?鬼！　悪魔！　人でなしー！　貧乳！？
容赦ないミルの声に、ありたっけの罵声を浴びせ続けた。
そして、漸くして本当の救いの女神は現れた。
ミルの後ろから、ボソリと声がかけられる。
「……何をしているの？」
「どきっ！」
ミルの表情がサーっと白くなる。
?アカネ～～！？

驚くわけでもなく、怒鳴るわけでもなく、ただアカネはそこにいた。普段静かで大人しい彼女からは、何やら強い威圧感を感じる。周りのギャラリー達も、ヒソヒソと声を潜めていく。怒っているのに静かなのが、かえって恐かった。

「ミルは、この子を外に逃がしてくるって、そう言って連れていったよね？」

「あはははは……いや、キララが山に帰りたくないって言うからさぁ……」

そもそもミルは寮からさえ出ていない。

無言でアカネは籠から彼を救いあげ、胸に抱きかかえた。ヒシっとしがみ付いた彼は、アカネの服を咥えて泣き続けた。

？二度とアカネから離れるもんか……？

「ミル……」

「……」

しばらくの沈黙の後、蛇に睨まれた蛙のように小さくなって、ミルは一言呟いた。

「……ごめん。やっぱ、売るんじゃなくて、有料のレンタルくらいにしとくんだった」

呆れるアカネの代わって、キララは思いっきり飛び上がってミルの顔をひっかいた。

1－（2）

エリュクフィル魔法学校は、山脈の麓に広がる大きな樹海を背にして、街を見下ろすように小高い丘の上に建つ。暖かな日の光を受けて淡く象牙色に輝く街は、湖へと流れ込むエリュク大河の後背地に位置し、魔法学校を囲うように旧市街地が建ち並ぶ。城塞のような魔法学校こそが国の中心とも見えるが、そこに国の中枢機関としての機能は備わっていない。

それは、街の反対側に湖を背にして建つ、さらに大きなエリュクフィル城が存在するためである。

ここは城塞が2つ向かい合うようにして存在する国『エリュクフィル』。

古い城を再利用するカタチで開校されたエリュクフィル魔法学校は、大陸屈指の研究機関であり、城自体が学園都市であり、世界で唯一の公的な魔法学校である。

魔法が過去の遺物と変わりつつある現代において、魔法に重きを置いて研究が行えるのは、このエリュクフィルが数多くの魔王伝承を残す遺跡都市であることに起因する。大陸に広がった魔法文明発祥の地とも云われ、イシュチェル中央教会と、その他の魔王・魔法信仰の全ての聖地である。

しかし、現代科学の発展したこの時代において、失われつつある魔法の解明は、急ぐべき及第点でありながら国の発展への大きな枷ともなりつつあった。

現在、本当の意味で魔法を使える者は、誰一人として存在しなかった。

名前だけの魔法学校。

それでも、過去の栄華は数知れず、魔法に関係なく全てのあらゆる英知がここに集まっている。

そんな偉大な学校で学べる喜びについて深く感慨を感じながら、

アカネは一つ溜息をついた。
尊大な魔法学校はどこまでも荘厳で、アカネの歩く寮塔と教室とを繋ぐただの廊下でさえ、何百年と続いた歴史の重みを感じさせる。煌びやかな装飾品はないものの、壁にかけられた絵画も窓からの薄明かりを受けて鈍く輝く何かの甲冑も、入学当時の学生にはそれだけで気後れを感じさせたもの。
?きったねー甲冑だなぁ？
この街に来て2年と少し、慣れてしまえばどうということはない。
それでも……と、アカネは小さく望まずにはいられない。
キララを胸に抱いたまま、後ろをこそこそとついてくるミルを振り返る。
「アカネ～、ごめんってば！　本当に悪かったって」
平謝りをする彼女を手で静止してアカネは言った。
「もういいよ。いつものことだし」
?アカネは許しても、この俺様が許さん～！？
肩越しにキララはミルを威嚇している。
「ミルも、せっかくのここの学生なんだし、そんなにお金集めに精出さなくたって……」
この学校はアカネからしてみれば、格式高い貴族たちが集まる上流階級そのもの。学生もお金持ちや貴族の御曹司が多い。ミルにしたって、有名な貿易商の娘である。がめつく小金を稼がなくたって、親からの仕送りが十分にあるはずだ。
「頭いいアカネみたいな特待生様とは違うの！」
それに対し、アカネは田舎から学力推薦によって留学することができた特待生。普段触れ合うことのない上流階級の学生達に少し引け目を感じながらも、学ぶ喜びを心から感じている優等生である。
「……私もそろそろ、特待生枠が危ういけどね」
特待生でなくなれば、アカネも一般の生徒と変わらず高い授業料を払わなければならないが、それでは半月を待たずしてアカネの家は破産である。それゆえ、ここで学び続けるために、アカネは常に

高成績をキープしている。
「うちだってね、そりゃあアカネんとことは違うけどさ、無い金かき集めて必死でやりくりしてるわけなのよ！　火の車！」
アカネは「おや？」と思う。入学当時は、そんなに必死ではなかったはず。
「ひょっとして、また成績下がったの？」
「ぎくーっ！」
図星を言い当てられ、おびえ始めるミル。彼女のこづかいは、成績に比例するらしい。
？やーい、バカめバカめ！？
「そんな変な商売考える時間あったら、もっと勉強したほうが」
一人と一匹の呆れたような視線に、ミルは串刺しにされる。
「素直に授業に出て、真面目に課題こなしていけば、試験だってそう難しいことないから」
「できるやつはみんなそう言うんだー！」
「ミル、３００エルで私を家庭教師に雇わない？」
「高いよ！」
格式高い研究機関とはいえ、そこに通う学生の全てが、学問を好きとは限らない。アカネのように本気で学んでいる者もいれば、学歴と学位のために親から無理やり通わされているような生徒も多く存在する。学生の質が落ちていると教師達が密かに嘆く一方、そういったお金持ちの家からのお金で研究が行えているのも事実で、生徒と教師それぞれのジレンマはいつまでたってもなくならない。教育機関とは兼ねてそういうものである。
「ところで、またキララを逃がしに行くの？」
話題をすり替えようと、ミルがアカネの腕の中を指して言う。白い小さな耳がピクリと動いた。
「名前までつけちゃって……」
キララの頭を撫でながら、アカネはもう一つ溜息をついた。
「もう森へ帰すのは諦めた。必ず戻ってきちゃうし。それに……」

ちらりとミルを眺めて、
「悪い学生に捕まって、売られちゃったりしたら可哀そうだし」
?アカネ〜！？
キララはこみ上げる涙が止まらなかった。
「うっ……だ、だから、本当に悪かったって。あ、あたしも別に本気で売ろうとしてたわけじゃないし」
?本気だったくせに！？
キッとミルを赤い小さな眼で睨みつけた。
キララという名前は、ミルが名づけたもの。いつまでも『あの白いの』では面倒だったから。アカネとしては、名づける前に森へ帰してやるつもりだったのだが。
「アカネは、もっと別の名前の方がよかった？」
「なんでもいいよ」
周囲にもキララという名前ですでに馴染み始めていた。
「じゃあ、外じゃないとしたら、アカネは今どこに向かってるの？」
キララを腕に抱いて、いつもの山歩きのカバンもなく軽装姿。今日は授業もない。
「いつもの研究室？」
「違うわ。というか、知ってて着いてきてたんじゃないの？」
ミルは違うと首を振る。ミルがついてきていたのは、金づるが放逐されると困るからであり、ルームメイトと仲違いしたままだと今後の（主にミルの）生活に支障をきたすからだ。
「今日はお客さんを迎えに行く日」
「お客？　客って、この白いののバイヤー？」
?ひ〜〜っ？
「違うから」
怯えている様子のキララを宥めながら、アカネをふと足を止める。
中庭と全学教育棟を仕切るこの広い廊下は、奥まで進むと正面ゲートへとつきあたる。授業の開始前であれば移動する多くの生徒達で賑わう通りだが、今は人影もまばらである。

廊下の壁や柱には、数多くの掲示物が並んでいる。教育関係、クラブ活動のポスター、それらの中でひときわ目立つ大きなポスターがある。
「今日お迎えするのは、今度の学会の大切なお客様よ」
エリュクフィル研究会合同連合大会のポスターを眺めてアカネは言った。
世界各地で持ち回りで行われる学会だが、今年はエリュクフィル魔法学校主催で行われる。
「今回の学会は、エリュクフィルの生誕祭と同時に行われるから、規模も特別に大きいみたい。名誉会員の特別講演会も多いのよ。今日はその特別ゲストのお迎え……って、昨日の夜、話したと思うんだけど」
「そうそう、聞いた聞いた」
迎えに行く途中に、キララのたたき売りを目撃したのだ。待ち合わせの時間が迫っているため、やむなくキララを連れていくこととなった。
「せっかくの生誕祭なのに、勉強会するなんて物好きだよね」
「そうね。まぁ、全部の会合に参加するわけでもないし、学会自体が半分お祭りみたいなものだから」
規模の大きな学会では、自分の研究に関連するところ以外、出席するメリットはあまりない。しかし、専門分野以外の研究について議論することによって、研究の視野が広がりまた意外な意見が出ることもある。学会発表は研究成果を公開し、名を広めるための重要な場であり、自身の研究に対しての新しい意見を聞くことのできる数少ない交流の場である。
「で、誰を迎えに行くの？」
「昨日話したでしょ？　地球科学の権威、ヨハン・ヴィルヘルム・リッター博士よ」
「……誰？」
アカネの顔が驚きに僅かに歪む。

「いつも使ってる教科書の著者の一人」
「ああ、この前ラクガキした写真の。で、どの人？　禿げてる人か、丸い顔の人なのか――」
「なんか頭痛くなってきた……」
　友人の学問に対する姿勢に、アカネは呆れを通りこえて悩ましく感じられた。
「リッター博士は、一番年老いた方よ。私達の学んでる学問の、基礎の基礎を築いた方だもの」
「ふ～ん」
「ちょうど今回の来訪では、私の研究室の話に興味を持たれているみたいなの。だから、私が案内することになって」
「魔力研を？」
「そう。エーテル魔力研を」
「へ～、珍しいねェ。いつも、他の先生達には毛嫌いされてるっていうのに」
「うん……」
　話しながら二人は正面ゲートの方へ足を進める。
「せっかくうちに来るんだからさァ、どうせなら魔王研とか案内した方がいいんじゃないの？」
「リッター博士は考古学じゃなくて、科学の方だから。あちらにはあまり興味がないみたい」
「でもさ、よりによって魔力研とは。地球科学の権威といえど、年寄りってのは物好きだなァ」
　自分の研究室を物好き呼ばわりされていい気はしない。アカネは少しムッとしながらも、否定することはなく、慣れたというような諦めの表情が見える。
？アカネをバカにすんなよー！？
　すると、突然後ろから、二人に声がかけられた。
「ふむ……物好きなのは確かじゃが、私はアカネさん達の研究をバカにしてはおらんぞ」

ギョッとして二人は振り返った。
すぐ後ろには年老いた一人の男性が立っていた。背丈はアカネ達と同じくらい、帽子とステッキを手に、白い髭を歪めて意地悪そうに笑っている。
「貴女がアカネさんじゃな。確かにその美しい赤い髪は目立っておるぞ」
「リッター博士！」
予期せぬ接触に驚いて、髪のことを言われて、アカネは少し顔を赤くする。
この国ではアカネのような赤い色素を持つ髪は珍しい。黒やミルのような茶、それらをもっと薄くしたような金髪の者がほとんどだ。赤い色素を持つ者はエルクベイジュよりも南の地域に多い。
待ち合わせの目印として、手紙でリッター博士にはアカネのことを伝えてあった。
そして、先ほどの失礼な発言を思い出して慌てる。
「申し訳ありません。私の連れが大変失礼なことを」
「あたしだけかよ！」
「はっはっはっ！　別にかまわんよ。物好きなのはその通りじゃし、写真に落書きされるのも慣れとる」
と、少し笑顔を潜めて、目を丸くしているミルに向かってリッターは言った。
「じゃが、アカネさんの研究をバカにするような発言は許されんな」
「ひ〜っ！」
「新しい発見は、人と全く違うことをしている研究から生まれる。最初は周囲にバカにされようとも、いずれは功績が認められ、大きな賞を受賞することもある」
「でも、天才ってのはだいたい死んでからしか認められないよね……」
「ミル！」
開き直ったミルの物言いにアカネは怒る。

「はっはっはっ、そうじゃな。じゃから、生きている間に認められた私は、ラッキーじゃな」
「おぉ～」
ミルは素直に感心したようで、驚きの声をもらした。
「あたしが研究とか学問が好きになれないのは、その成果がすぐに実らないってとこなのよね。商家の娘ってせいもあるのかもしれないけど」
「ミル、それは勉強嫌いの言い訳だと思う」
「学問の追及というのは、一種の趣味みたいなものじゃからな。お金儲けのように、直接身になるものではない。知らない事象があると、その知識を収集したいというコレクター魂が疼くんじゃよ」
知識欲とはそういうもの。ここまで極端ではないものの、研究者は少なからずこういった思いを抱く。
会話が一呼吸ついたところで、アカネは姿勢を正して改めて自己紹介を行った。
「改めて、初めましてリッター博士。私はエリュクフィル魔法学校3回生のアカネです。こちら、同じく3回生の――」
「ミルです。先ほどの失礼な発言、大変申し訳ありませんでした」
畏まってミルも謝罪をした。
「構わんよ。私はヨハン・ヴィルヘルム・リッターじゃ。よろしく、お嬢さん方」
「駅まで迎えに行く予定だったのに、遅れてしまって申し訳ありません」
「いやいや、アカネさん達は遅刻しとらんよ。ただ、私の方が早く着いてしまってな。街を見ながら学校まで先に来てしまったのじゃ。学校までの案内はいらんからの」
学園前の汽車の駅から学校までは目と鼻の先。それに、この国にいてエリュクフィル魔法学校までの道を迷う者はいない。エリュクフィル城と並んで最も目立つ建物であり、市街地は二つの城を軸として大通りが整備されている。

「ところで、その白い生き物はペットかな？」
キララを指摘されて、アカネは少し慌てた。
「す、すみません。戻してくる時間がなくて。それに、学校でペット飼うなんて校則違反ですし」
「なーに、私はこの学校の教師ではないしの、校則を取り締まる理由もない。気にせんでくれ」
「キララっていいます」
ミルが得意気に言う。
「ほほう、珍しい生き物じゃな。何という種類の生き物なのじゃ？」
リッターがキララを見ながらアカネ達に聞いた。話のネタにされ、三人に注目され、キララは居心地悪そうに耳の裏をかいた。
「それが、調べても分からなかったのです。図書室の本でも、街のペットショップでも分からなくて」
直接街のペットショップまでキララを連れていったわけではないが、白くて赤い目をした動物だと教えると、ユキウサギだという返答がきた。キララはウサギではない。
「調べ物は研究者の基本スキルじゃな。調べても分からないのは、おぬしらのスキルが未熟なのか、それとも新種なのか」
「新種！？」
新種という言葉に声を荒げたのはミル。目の色を変えた彼女を見て、キララはゾッとした。
まさかという顔でミルを制して、アカネは話す。
「さすがに新種はないと思うけど。せっかくなので、これから向かう研究室の方で、一緒に話を聞いてこようかなと思っていたのですが」
「なるほどのぉ」
納得いったという顔でリッターは頷いた。
「これから向かうところって？　学校見学じゃないの？」
「学校の案内はついでなの。今日はリッター博士が見学したいという研究室があるので、まずはそちらを案内することになっているの」

「私は考古学の人間ではなく、科学者じゃからな。歴史的建造物の観光もぜひさせてもらうが、今回はそれがメインというわけではない」
三人はゆっくりと足を進めながら話す。向かう先は、校舎が見渡せる最上階でもなく、かつて空中庭園と呼ばれた美しい中庭でもない。廊下の端から地下へと続く階段へと向かった。
「私が今回エリュクフィルに来た目的は二つある。一つは、アカネさんの研究を覗かせてもらうこと。そして、もう一つがこれから行く研究室じゃ」
「講演会がメインじゃないんですね」
ミルが茶化したように言う。
「あんなもんはついでじゃよ。そういう理由でもないかぎり、こちらに来る機会がないからの」
リッター自身はあんなものという講演会だが、科学の大御所の話が聞ける滅多にない機会なので、講演会には数多くの聴衆が集まる予定である。アカネももちろん行くつもりだが、前売りの整理券が確保できなかったので、立ち見になってしまうだろう。
「もちろん、メインはアカネさんのところじゃが、こちらの研究室も非常に興味深い」
「アカネ、地下に下りていくってことは、行くのはやっぱり……」
「そう、魔物研よ」
「げ！」
?魔物研？？
「魔物研とは？」
リッターが聞きなれぬ言葉に首を捻った。
「魔物研とは、研究室の愛称みたいなものです。魔法学校というだけあって、魔法に関する研究室も多いので、それぞれに呼び名があるんです。歴史民族学研究室なら魔王研、今から向かう生物進化学研究室なら魔物研、私のところは魔力研……」
愉快そうにリッターは笑った。

「それは言い得て妙じゃな。まさに、魔力研じゃ」
「アカネ、あたし魔物研は苦手なのよね」
「そう？」
「だって、恐いじゃない」
「なかなか可愛い子達よ」
「あたしはアカネみたいに、動物に好かれるタイプじゃないの」
？そりゃそうだろうな？
　ミルの告白にキララは納得する。
「動物は人間よりも敏感なの。後ろめたい気持ちがあると、動物達は寄ってこないわ」
「うっ……」
　エリュクフィル魔法学校の地下には大きな食堂がある。正確には、魔法学校は丘の斜面に建っているので、食堂が地下にあるのではなく、正面ゲートがやや高い位置にあるだけだ。そして、食堂を横目に廊下を通り過ぎ、更に狭い螺旋階段を下っていく。
「あたし、入学した時から、絶対こんな陰気臭い場所では研究したくないって思ってたんだけど」
「まぁ、それは同感かも」
　アカネは野外観察をメインとしてフィールドで研究を行うタイプである。動物は好きでも、部屋に籠って研究するのは性に合わないだろう。
「若い頃はいろいろ経験しておくものじゃぞ。私も若い頃は、何日も実験室に籠って研究したものじゃ」
「やっぱあたし、勉強はダメだ」
　たどり着いた地下通路は、思ったほどの淀んだ空気はなく、明るい照明機に照らされているため他の廊下とほとんど変わらない。機材や物資の搬入のために、学校の横の斜面から大きな出入り口が開けられているため、それほど空気が籠っているわけではない。しかし、とある香りが彼女達の鼻をくすぐる。
「……なに、これ？」

ミルは露骨に顔をしかめ鼻を抑える。アカネは慣れたものだが、都会育ちのミルには我慢ならないのだろう。研究室特有の古書の香りでもなく、化学実験室の薬品の臭いでもなく、これは生き物を飼育している場所の独特の匂い。

アカネは手近な部屋の扉をノックし、研究室の中の人を呼んだ。

「すみません、リッター博士をお連れしたのですが」

事務室のようになっている部屋からは、しばらくしてツナギのような作業着を着た中年の男性が出てきた。ミルには動物園の飼育員にしか見えないが、これでも教授である。

「これはこれは！　ようこそお越しくださいました、リッター博士！　私はコーシー・クレイグと申します」

「学会前の忙しい時に、無理を言ってすまんかったな」

「いえいえ、博士に見てもらえるなんて光栄なことです。ぜひご意見などお聞かせください」

クレイグは部屋の奥へ「博士が来られたぞ！」と声をかける。すると、慌てたように一人の男性研究員が出てきた。アカネ達よりはやや年上の男性研究員、まだ学生助手のようで、リッターにあいさつを行った後、アカネ達にも同様に紹介を行った。

「クレイグくんの論文は読ませてもらったぞ。なかなかの成果じゃな。周りの評判も良い」

「ありがとうございます！　では、さっそくご案内いたしましょう」

クレイグが先頭に立ち、皆を廊下の奥の方へと案内する。

ここの地下フロアは、かつてエリュクフィル城の牢屋があった場所。鉄柵や独房の厚い壁はそのほとんどが取り壊され改修されたが、一部を利用して大型生物などが飼育されている。

魔物研こと生物進化学研究室では、このエリュクフィル地域の現生生物や、生物化石による生命進化の研究が行われている。しかし、ただの生物の生態系を調べている研究室ではない。エリュクフィル特有の、『魔物』と呼ばれる生物の研究が行われている。

ここは、大陸で唯一、『魔物』の人工飼育に成功した研究室であ

る。

1―（3）

『魔族』と『魔物』では、厳密には意味が異なる。

『魔族』とは人間に非常によく似た生物種で、人間と異なるのは魔法が使えるということ。『魔物』とは、『魔族』以外で体内に魔力を有しているとされる生物群の総称である。古来より、魔族は魔物達を使役し、生活や戦争などに利用してきたと伝えられている。それらの魔物達の生態系は、現在でも謎につつまれた部分が多い。

しかし、魔族とは異なり、一般的に魔物は魔法が使えない。かつて存在したとされる、ドラゴン種は魔法を使うばかりか、人間の言葉も理解できたと伝えられているが、そのドラゴン達も現在では化石でしか存在しない。魔法という明確な証拠がないため、魔物という種の学識的な区分は非常に曖昧なものである。

したがって、魔物という種は、一般的に定着している愛称のようなものである。だが、一方で魔物という種には、他の生物とは違う明らかな特徴があった。

魔物は、魔族同様に、魔力に染められた真っ赤な瞳を持つ。

その深い真紅の瞳に睨まれ、キララは身を震わせた。

?うわぁ……?

「うわぁ……」

間近で見る魔物の迫力に、ミルも感嘆の声を上げている。

青灰色の大きな体躯と赤い眼、鋭い牙と角を持つ姿は、誰にでもドラゴンと遭遇したような印象を与える。目の前に佇む魔物は、成人男性をひとまわりほど大きくしたようなサイズであり、化石・伝承から見るドラゴンとは、ふたまわりも縮小したサイズなのだが、博物館の化石や絵画とは違い本物の『魔物』を思わせる迫力がそこにはあった。

「これだけ近くで見るのは初めてじゃな」

リッターも感心したように呟いた。

「ドラゴンなのですか？」
アカネの質問に対して、クレイグは首を横に振って答えた。
「いや、ドラゴンではない。学識名は【泥頁竜（でいけつりゅう）】通称『セラドン』と呼ばれる種で、こいつらはエリュクフィル地方にのみ生育するスレイトセラドンだ。唯一のドラゴンの子孫だと言われているが、セラドンは哺乳類だよ」
「ドラゴンは爬虫類？」
ミルの質問にもクレイグは順に答えていく。
「恐竜は大型爬虫類に分類されているから、おそらくドラゴンもそうだろうと考えられている。化石の研究からも、ドラゴンはとても恐竜に近い生き物だと考えられているが、このセラドンの研究をしていると、ドラゴンはドラゴンという別の類に分けるべきだと私は思う。ドラゴンは、なんと言っても魔物の祖だからね」
今から二億年前、世界中で栄えたというドラゴン種。このドラゴンこそが最古の魔物であり、全ての魔物の始祖と認知されている。しかし、現存する魔物は、セラドンのような哺乳類もいれば、ドラゴンとは全く姿が異なる魚類の中にも存在する。全てがドラゴンから進化したとは考えられない。
「祖とは言われているが、魔物達の存在は進化生態学からすれば極めて異常な生き物だよ」
ミッシングリンクの先に、突如姿を現す魔物達。ただ単に、まだ中間型化石が発見されていないだけという可能性もあるが、それだけでは説明できない進化連鎖間の空白期間が存在する。
「魔族も、ドラゴンなのですか？」
「いや、一部のいかれた連中は、魔族を竜人などと呼んでいるが。魔族は間違いなく人類だよ。我々と同じだ」
数百年前に姿を消したと言われる魔族達。しかし、彼らは人間であり、大きな力と知恵を持つ魔物達の王である。絶滅したとは考えられていない。
「人の世に紛れて生活していると言われているが……」

「魔族がおるなら、是非会ってみたいのぉ。私の余生の夢は、彼らに会うことじゃ」
「リッター博士、余生というにはまだまだお早いですよ。研究の第一線で功績を残していらっしゃるというのに」
リッターの言葉に、クレイグは尊敬の念を込めて話す。アカネ達からすれば、リッターはまるで手の届かない神のような存在である。
そんな偉大な人物が、自分の研究に興味を示してくれている。そのことにアカネは誇らしくなるとともに、少しだけおもはゆい気持ちがして顔を伏せた。
「このセラドン達は、何を食べるんですか？」
「基本は肉食ですね。しかし、気位が高いのか、野生の成熟したセラドンは我々の与える食事には全く手を出さない。むしろ、こちらが食べられそうになるほど」
クレイグがそこまで話したところで、ミルは檻の隙間からセラドンに伸ばそうとしていた手を慌てて引っ込めた。
「ほほう、ヒトも食べるのか？」
「食べますね。好んで襲うことはしませんが。ただ、このセラドン達は、生まれた時からここにいるので、ヒトを襲うことはありませんよ」
リッターとクレイグが話をしている間に、ミルがアカネに小声で話しかけてきた。
「ねぇ、キララのこと、聞いてみるの？」
「うん、そのつもりなんだけど」
近くにいた学生の男性研究員をつかまえて、聞いてみることにした。
「すみません、少しお聞きしたいことがあるのですが」
「これって何？」
ミルは両手で掴んでキララを差し出した。
？よぉ！？
白い生き物は、ピンと耳を動かした。

「森で見つけたのですが、何という種の生き物なのかわからなくて」
男性研究員は不思議そうな顔でキララの赤い目を覗きこむ。美しい白銀の毛並みにセラドンと同様に濃い深紅の瞳。しばらくして、研究員は驚きの声をあげた。
「ま、まさか！」
慌ててクレイグを呼ぶ。
「せ、先生！　こ、これを見てください！」
何事だと、リッターと一緒に話していたクレイグがこちらを振り返る。
リッターとの会話を中断され顰め面をするクレイグ。だが、キララを目に捉えて、その瞬間、彼は目の色を変えた。
「こ、これは！　もはや絶滅したものだと思っていたが……」
食い入る様にキララを見つめる。女の子達の視線や、ミルのお金の絡んだ恐い視線とも違う、研究者による好奇の視線に見つめられ、キララは身震いした。
「クレイグ先生、知ってるんですか？」
「あ、ああ、こいつは【白鴒獣（はくれいじゅう）】という生き物だ。私も絵でしか見たことがないぞ」
「ほっほぅ！　これが白鴒獣なのか！」
リッターも名前を聞いて驚きの声をあげる。
「博士、ご存じなのですか？」
「いや、わしは名前くらいしか知らんよ。かつて『蘇芳の魔王』に仕えた魔物であり、過去に絶滅したと」
「どういう生き物なのですか？　図書館の本で調べても、何も分からなかったのですが」
アカネの言葉に、クレイグは頷いて話し始めた。
「普通の本では、調べても載っていないかもしれない。すでに絶滅したとされているし、なによりこの白鴒獣は、教会のブラックリストに載っているからな。宗教関連の研究資料の方が、よっぽど詳しいかもしれない」

「宗教関連の資料ですか」
さすがにそこまではアカネも調べていない。
「ブラックリストって……なんでコレが邪悪なんだろ？」
ミルがキララを見ながら言う。大人しいこの生き物を見て、アカネも不思議に思った。なぜ、この美しい白鴿獣に悪魔の烙印が押されているのか。
「おそらく、この赤い目が原因なのだろう。この国の人間は、赤目の生き物に対して、あまりいい感情を抱いていないからな」
そう言って、クレイグは気の毒だという表情で顔を伏せた。
それはイシュチェル教会の神話に由来する。神の使者であるイシュチェルは人間達を率いて、赤目の魔族とその眷属であるセラドン達を一掃したといわれている。赤目は神に反する者達の一つの特徴なのだ。
アカネの方を少しだけ伺うようにしてクレイグは話す。
「大陸の南では珍しくないとはいえ、アカネさんには辛いことかもしれないが、この国の人間達には赤目の者を嫌う習慣が根強く残っている」
それはキララも気づいていた。
アカネのことをあまり快く思っていない生徒は多い。そんなアカネに少しでも好印象を与えられるならと、アカネのペットとしてキララは大いに愛想をふりまいてきた。
しかし、生徒達はアカネをただ毛嫌いしているだけではないような気がした。
キララはアカネの優しい赤の瞳が少しだけ悲しみに歪んでいるのを感じた。
嫌われているのはアカネのような大陸南の出身者だけでなく、泥頁竜セラドンやこの白鴿獣までもが迫害を受けているということが、アカネには何より悲しかった。
「まぁ、それだけの理由で白鴿獣が絶滅に追い込まれたわけではない。一番の問題は、密猟にある」

「密猟？」
「これだけ美しい毛並みを持つ生き物だからな。毛皮は高く売れるし、ペットとしての愛玩性もある。見るに見かねた教会が猟の禁止をしても、狩りを行う者は一向に減らなかった。こうして白鴒獣は絶滅に追いやられ、歴史からはその姿を消した」
「が、絶滅したと思われた白鴒獣はこうして生き延びていたと」
「そう！　うわ～、これは感動だなぁ～」
年甲斐もなくはしゃぐクレイグを前に、ミルの腕の中で、キララはエヘンと胸を張る。
「おまえさん達、白鴒獣をどこで見つけてきたのじゃ？」
リッターがアカネ達に尋ねる。ミルはアカネに視線を促し、彼女は迷ったように、恐る恐る答えを告げる。
「裏の森で、他の動物に襲われているところを保護したのですが……」
「ふむ……」
どちらかというと深刻な顔でリッターは頷いた。
「二人は、他の人にこの白鴒獣のことを話したかい？」
クレイグの言葉には首を横に振る。
「いいえ。ペットを連れていることが知られればあまり良い顔はされないので、先生方にはもちろん、寮も同じ階の子達以外には……」
と話しつつ、アカネはミルをジロリと睨む。冷や汗を隠して、ミルは慌てて首を横に振る。ミルも寮生以外にはまだ口外していない。調べようにも種類が分からなかったので、種別が判明したこの後に実家へ連絡して相場を調べようとしていたことは秘密である。
「そうか」
クレイグも難しそうに頷いた。
同じく困ったような顔をするアカネに対して、ミルは首を傾げる。
「どういうこと？」
意味を理解していないキララも、キョトンとアカネを見つめている。

「ミル。今、いくらで売れるかなって考えたでしょ？」
「ぎくっ」
ビクッとキララは体を震わせる。
「つまり、そういうことだよ」
絶滅したとされる生物種が生存していたのだから、その価値は計り知れない。
「コレクターでなくても、それの専門じゃない僕でさえ喉から手が出るくらいおしい研究素材だよ」
白鴿獣の存在が世に知られれば、再び密漁などが横行することになるだろう。
事態の深刻さに気付いたキララは、サーっと顔色を変えた。
「ク、クレイグ先生は！」
慌てるミルに、クレイグは落ち着いたように話す。
「僕達の方は心配ないよ。ここはあくまで、動物の保護を考える研究部門だからね。絶滅の危機を招くようなことは絶対にしない」
そういうこともあり、先生方の中でもペットを飼うことに比較的寛容なクレイグだからこそ、アカネはキララのことを相談することができたのだ。
「ほっほっ、わしは最近、ちと忘れっぽくなっておってのぉ」
リッターも口外する気はないようだ。
ひとまずアカネ達はホッと胸を撫で下ろす。
「しかし、おしいな。学会で発表すれば、一躍有名になれるというのに」
ポロリと洩れるクレイグの本音にアカネ達もギョッとするが、「先生、ダメです！」と他の研究員にも窘められる。
「白鴿獣は何を食べるんだ？」
「雑食で、何でも食べる。生魚は食べたけど、生肉はあんまり食べなかった。焼いて焼肉のたれつけたら、喜んで食べてた」
そんなのやってたの？　という、アカネの視線は無視してミルは話す。白鴿獣はなかなかにグルメな生き物のようだ。

「ほう、セラドンとは生態がまた異なるようだな。セラドンは基本的に肉食で、野菜や果物はほとんど食べない。そういえば、セラドンの健康食として開発されたクッキーのような食べ物があるが、食べさせてみるか」
クレイグはとり出したセラドン用の餌をキララに近づけた。
しかし、予想に反して、キララは見向きもしなかった。
「……あれ？」
疑問の声をあげたのはミル。食べ物と聞けば飛びついてくるキララが何も反応を示さないのが不思議だった。
キララは、何かをジッと見つめていた。
違和感に気づき、ミルはアカネの方を見ると、彼女もまたキララと同じ方向を見つめていた。
「ア、アカネ……？」
アカネは牢屋の奥の、セラドンの一匹を見つめていた。先ほどまで、他のセラドン達と同じように大人しくしていた一匹は、呻くように首を振っている。
どこか様子がおかしかった。
彼女達の視線を追い、事態に気付いたクレイグは小さく舌打ちをした。
「くそっ、またか！」
他の部屋からも研究員を呼び出し、最初からいた男性研究員が牢屋の中へと入りセラドンを取り押さえようと試みる。他のセラドン達は、その様子がおかしくなった一匹をまるで威嚇するように距離を取り睨みつけている。
「これはどうしたのじゃ？」
一人冷静な声を発したリッターに気づき、慌ててクライグが弁解する。
「発作……みたいなものでしょうか。我々もよくわかっていないのですが、ここ最近、このように体調を崩す個体がいるのです」
「何かの病気なのか？」

「いえ、病気の類とも考えられませんし、何より数十年飼育を続けてきて、これまでに全く記録にない症状なのです。体調不良もなく、突然あのように苦しみ始めるのです」
「多くの個体が同じ症状を示すならば、感染症などが疑わしいが……」
「この研究室で飼育している他の生物では発作がないことから、セラドン特有の病気ということも考えられますが」
研究員達は暴れるセラドンを取り押さえようとするが、なかなか落ち着かない。むしろ、呻くような声は徐々に大きくなり、やがて悲鳴のような鳴き声をあげ始める。
「これは……」
鳴き後に比例して、暴れ狂う力も強くなり、ついには研究員達が大きく吹き飛ばされた。
大きく広げた翼は天井や壁にぶつかるが、それさえも気づいていないように呻き続ける。
「まずい！　これほど激しい発作は初めてだぞ！」
発作を引き起こしていない他のセラドン達も逃げるように慌て始めた。幸い、同じ牢屋に入っていた他のセラドン達は皆先に他の牢屋へと引き離されている。地下の階層はあちこちから聞こえるセラドン達の鳴き声によって、より一層の騒がしくなる。
「いつもなら、すぐに大人しくなるのだが……」
「何か落ち着かせる方法は？」
アカネが聞くが、クレイグは首を横に振る。
「原因も分からないのに、有効な手もないですよ。せいぜい取り押さえて鎮静剤を打つぐらいしか」
人より二まわりも大きな巨体をどのようにして押さえれば良いのか。
「くそ！　おい、緊急時用の装備を持ってこい！」
クレイグが若い研究員に指示を出す。
周囲には、セラドン達の鳴き声を聞いて駆けつけてきた他の研究

室の先生方や、野次馬が増えてきている。
その時、突然キララが走り出し、鉄格子の中へと飛び込んだ。
驚いたミル達だったが、その後に続くように駆け込んだアカネを見て、慌てて声をあげた。
「アカネ！」
他の研究員達の静止の声もふり切って、アカネはセラドンと対峙するキララのもとへ駆けつける。
キララを抱き上げると、キララはアカネの腕を伝って肩へとまわり、セラドンへ威嚇を始めた。
セラドンは大きく翼を広げ、アカネ達へ向けて威嚇をするが、その赤い瞳にはアカネ達の姿を捉えきれていないようだった。頭痛に顔をしかめるように、セラドンは表情を歪ませ頭を振る。
研究員達も近づくことができず、遠巻きに様子を伺う。
「アカネさん、戻るんじゃ！」
リッターが叫ぶ。クレイグはアカネの元へ駆け寄ろうとした。しかし、彼がアカネの手を引く直前、セラドンの一際大きな鳴き声によって歩みは阻まれる。他の生き物ではありえない、目には見えない魔族の大きな威圧感を感じて思わず足が竦む。
ひとしきり叫んだ後、セラドンは大きく息を吐いた。
深い深い溜息、腹の底から轟くような唸り声と共に、口の端からは僅かな炎が漏れた。
「なん、だと……！」
吐き出されたのは、微かな火炎。それだけでは焚き火の種火にもならないような、僅かに瞬いた小さな炎。それを見てクレイグ達研究員は驚きの声をあげる。
「そんな馬鹿な！」
「セラドンが火を吹くだって！？」
「これまで、セラドンが炎を吹いたことはないのか？」
「ありませんよ！　そんなことがもし起こっていれば、この学校は数十回は大火事になってます」

リッターの問いに興奮した様子で答えたクレイグは、アカネを呼び戻すことも忘れて、他の研究員達に再び指示を出す。
「おい、消火器を持って来い！　消防局にも連絡だ！　それから、その個体を絶対に傷つけるな！」
牢屋の外にいた研究員達は慌てて動き出す。中でセラドンを取り押さえようとしていた研究員達は、ただただ目前に存在する魔物の恐怖に顔を引きつらせている。指示がなくても、身を挺して取り押さえる気力はないようだった。
叫ぶのを止め、やや落ち着いた様子を見せるセラドンだったが、その深く赤い瞳にはより強い眼光が宿っている。その強い眼差しに睨まれ、クレイグ達は身を引くが、アカネは一歩も動かなかった。
？アカネ、逃げろ！？
しかし、アカネは引こうともしない。
キララはただただセラドン以上の眼光をもって、小さな赤い瞳で睨みつけた。
アカネは、そのセラドンの瞳に恐怖を感じなかった。
一歩、また一歩とセラドンへと近づく。
セラドンはまた息を吸い、呻くように頭を振った。
「いけない！」
気付いた瞬間、アカネはセラドンの胸元へ飛び込んだ。
誰かがあっと声を上げる間もなく、アカネはセラドンの大きな頭を腕で抱え込んだ。
そして……。
研究員の僅か横を、セラドンの大きな火炎が襲った。先ほどとは比べ物にならないほど大きな、人一人を軽々と焼いてしまいそうな激しい炎。灼熱の輝きを放ちながらも、吐息のようにとても静かな火。
一瞬で熱が過ぎると、そこは原型も残さず真っ黒になった炭と石壁が現われた。
遅れて悲鳴が上がった。

すぐ横で難を逃れた研究員の男性は、悲鳴を上げることも忘れてズルズルと牢屋の床にへたり込んだ。
檻の外は混乱する。
しかし、セラドンは落ち着き始めていた。アカネに頭を押さえつけられながらも、暴れることなく静かに息を整えている。
「大丈夫、だから。落ち着いて……」
アカネは、セラドンの瞳に敵意が無いことを感じていた。瞳に映るのは、腕から伝わる僅かな鼓動は、怯え、戸惑いを見せる森の小動物達と何も変わらない。抱きしめていると、少しずつ落ち着いていくのを感じる。肩の上で威嚇を続けていたキララには、何も心配ないよと頬を傾ける。
徐々に、あたりは静まり返っていった。
他のセラドン達は落ち着き、アカネに抱かれる一匹も元の瞳の色を取り戻し始めていた。
そして、大人しくなったセラドンを見つめながら、頭ではなくその個体のお腹の方に手を当てながら、アカネは静かに告げた。
「クレイグ先生。この子は……このセラドンは、妊娠しています」
「……なんだって？！」
クレイグの驚いた声に、地下の階層は一気にざわざわとした人のざわめきが戻ってきた。
周囲のセラドン達も落ち着きを取り戻し、発作を起こしたセラドンもアカネに頬を擦り寄せた後、身じろぎするように羽を動かす。
しかし、そのセラドンがアカネの手を離れた後も、檻の中には誰も近寄ろうとはしなかった。クレイグも驚いた様子のまま固まっている。
アカネ達に近づく者はいなかった。
ミルでさえ、声をかけることができなかった。
囁き合うのは、発作を起こしたセラドンのことではない。
魔物を宥める赤い目をした彼女のこと。
「あの子は、いったい……」

「魔物を手懐ける……」
「赤い髪と瞳の……」
キララは気がついた。
アカネを取り巻くのは、田舎者に対するいじめでも、お金のない弱者に対するいびりでもない。腫れ物にでもさわるような、未知のものに対する恐怖だった。
遠巻きに見つめるミルの目にも、セラドンを手懐け、キララを肩に乗せた赤い髪の彼女の姿は、魔族そのものに見えた。

2－（1）　黒い髪の青年と魔法の花

キララはとても不機嫌だった。
アカネに叱られたとか、ミルにいじめられたとか、そういうのではない。
最近では、部屋を抜け出してアカネの授業中に教室へ潜り込んでも怒られなくなった。毎日脱走するキララの様子に、アカネ達は諦めていた。
「せめて授業中は大人しくしててね」
そう言われ、アカネの隣で先生の話を子守唄に昼寝をするのが日課となっている。キララは鳴くことがないとても静かな動物である、またとても賢い生き物である、それらの事実がキララの行動に目をつぶる一つの結果となっていた。
彼が不機嫌なのは、アカネが皆に嫌われているから、という理由でもない。
なんでこんなに優しいアカネが嫌われているのか。キララにしてみれば不思議で仕方ないのだが、アカネが嫌われていることは、かえって嬉しいことだと思っていた。
？余計な虫がつかなくていい！？
ただし、一人だけ例外がいた。
キララの不満の元凶。
薬学の授業、全教室内でも比較的大きな講義室の中。静かな教室内には教師のカツカツと黒板に文字を刻む音と、生徒達の板書をノートに書き込む音だけが響いている。キララはそっと瞼を開き、アカネの隣で、アカネ達と同じく真剣な表情でノートをとる男の横顔を見た。
正直言って、キララの方が分が悪い。
明らかだった。言葉の壁という前に、種族の壁がある。彼女は振り向いてもくれない。それに対して、ヤツはアカネに対してガンガ

ンと積極的なアプローチを見せている。あまり友人の多くないアカネにとって、彼の存在は特別だった。
やり場のない怒りを抱え、キララはヤツに見せ付けるようにアカネの膝の上に丸まった。隣の男はチラリとこちらを眺めただけで、すぐに黒板に目を戻す。アカネはキララを見ることもなく、ただ教師の話を聞きながら空いている左手でキララの頬を撫でていた。

「最近ってば、物騒よね～」
アカネの後ろにやって来たミルは、唐突に話し始めた。
エリュクフィル魔法学校の食堂はとても大きい。かつてエリュクフィル城として機能していたこの建物は、食堂でさえ広く豪華であった。天井からはシャンデリアが釣り下がり、壁には有名画家の絵が残されている。しかし、ここが学生達の大衆食堂になってから年月も長く、造りはりっぱではあるがお世辞にも美しいとは言い難いものであった。
そんな食堂のテラスに近い窓側の席、四人がけの丸いテーブルにアカネは座り、その隣にミルは定食の乗ったお盆を置いて座った。
「物騒って、何が？」
アカネはキララに自分の定食の野菜炒めを与えながら聞く。
「さっき、他の子達が話してたのを聞いたんだけどさ。また列車強盗だって」
ミルはそれだけ言って、キララのそっちもおいしそうだなという視線を無視して、自分の定食をガツガツと食べ始めた。
「テロなの？」
「いや、それはちょっと違うんじゃないかな？　犯行声明出てないし。それに、もう犯人は捕まったんだって。祭も近いんだし、止めてほしいよね」
そうは言いながらも、ミルは完全に他人事の口調だ。
「アカネは列車に乗ったことあるんでしょ？」

列車は非常に高価な乗り物だ。まだまだ辻馬車での移動の方が主流である。大移動をする場合には便利だが、やはり小回りのきく馬車の需要が減ることはない。
「一回だけね。ミルミギアから、ここへ出てくる時に乗ったの」
「どうだった？」
「最初は恐かった。でも、すごいスピードで草原を駆けてゆくのは、とても感動したわ」
「いいなぁ～、あたしも乗ってみたい」
「今、また強盗に襲われたって話してたのに？」
「そんなに遭うなんて、宝くじに当たるような確立なんだから、大丈夫に決まってるでしょ。事故の多い馬車の方がよっぽど危険よ」
キララに漬物を与えながらミルは気楽に話す。初めて与えられた食べ物に恐る恐る、それでも興味津津といった様子でキララはカリポリと漬物をかじった。
?うぇ～っ！??
お気に召さなかったらしい。ミルを睨みつけながら、ペッペッと吐きだしている。
「ま、あたし達が気をつけなくちゃいけないのは、そんな強盗より誘拐事件だろうけどさ」
可愛いあたし達が次に狙われるかもよ？　おどけた表情でミルは言う。
?ミルを誘拐しようとするヤツなんていないよ?
固いパンをかじりながら、キララは一人呟いた。
「ミルは良家のお嬢様なんだから、気をつけた方がいいよ」
アカネは真剣な表情で忠告した。
ミルはこう見えて、街の仕立て屋の社長令嬢である。機械が徐々に発達し、布の仕立ても手動から機械に変わりつつある。そして街の伝統工芸も汽車を足にして大陸全土へと広がっている。ミルの親の会社は、その最先端を行く巨大企業。
昔ながらの貴族ではないために、一部の貴族の生徒達はミルのこ

とを嫌っているし、ミルもそんな貴族達を毛嫌いしている。
「あはは。大丈夫だよ、この学校に通ってるうちは」
寮も学校の敷地内にあるので、今の生活が一番安全であるのは確かだった。
「今のところ、この学校からの被害者は出てないんだし」
「でも、最近は若い女の人の失踪事件、多いらしいよ。今朝の新聞にも載ってたみたいだし」
「そんなの載ってたっけ？」
寮の食堂にある新聞をアカネは毎朝少しだけ読んでくる。ミルもたまに読むが、彼女の読むような記事はそういった記事ではなく、目についた面白そうな記事だけ。
「失踪事件だけじゃなくって、『エーテル症候群』も流行ってるみたいだから。気をつけた方がいいよ」
「『エーテル症候群』って、例の『魔族病』ってやつ？」
「そう」
？魔族病？？
正式には『エーテル魔法元素過敏性赤眼症候群』と名付けられているが、一般的には『魔族病』と呼ばれるものである。原因不明の地域病で、大陸全体でもこの地域だけの特有の病気である。
「あたし、詳しいことは知らないんだけど。発症すると魔族になっちゃうっていう病気でしょ？」
「別に、本当に魔族になるわけではないけど」
そもそも魔族の定義自体が曖昧なので、魔族になるというのも都市伝説や迷信のようなものである。
「軽い症状であれば微熱が続く程度なんだけど、重いものになれば、魔族のように目が真っ赤になるの」
目の充血などとは違い、また雪ウサギなどのように色素異常で血液の色が映り赤く見えるのではなく、文字通り瞳が真っ赤に染まる症状。その姿はまるで、魔族や泥頁竜（でいけつりゅう）セラドンのような魔物を彷彿とさせる。発症後の症状には個人差があり、軽いものであれば微熱

や頭痛が続く程度だが、重くなれば精神錯乱や細胞異常による死もありうる。
「でも、死ぬって言っても、体力の弱ってる爺婆だけでしょ？　風邪で寝込むのとほとんど変わんないんだし」
「風邪も流行り病も、恐い病気だと思う」
「それに、原因不明じゃあ予防しようにも何もできないんだけど」
「……それは、手洗いうがいをかかさないとか、体力落とさないようによく寝るとか」
一説には、大気中の魔法元素が原因で発症すると考えられている。しかし、魔法元素の存在自体があまり世間には認知されていないので、『魔族病』は原因不明の奇病として恐れられている。
また、症状が治まれば眼の赤みも取れることもあり、原因不明の奇病でありながら、風邪と同様に比較的軽視しがちである。
「まぁ、アカネみたいに、生まれつき目の赤い人もいるわけだしね」
気にしないとばかりに話すミル。
アカネはいつものように微笑んだが、その笑みには少し陰りがあることをキララは感じた。
「じゃあ、ミルは今朝、何の記事をあんなに真剣に読んでいたの？」
朝の様子を思い出してアカネが尋ねる。
「それはもちろん、魔王の記事よ！」
「魔王？」
この地の出身ではないアカネは、魔王の話についてよく知らない。最近の話は、断片的にしか聞いていない。
「それは、『リーゼの予言』の魔王？」
「そう、それ」
『リーゼの予言』とは、イシュチェル教会が十数年に一度行っている伝統儀式の一つ。今後数年間の天災などを大々的に予言するという神事である。かつては、大地震や日照りによる食料不足などを予言したらしい。
「でも、それは結局、予言じゃなくって占いなんでしょ。それほど

信憑性のある話とは思えないんだけど」
「何言ってるのよ、毎朝の新聞で見てる『今日の運勢』とは違うの！　街の皆も信じてるんだから」
ミルは興奮しながら嬉しそうに話す。
例年の『予言』の儀式では、断片的な天災の予言や、まるで占い師が人を煙に巻くように曖昧にしか表現していなかった。しかし、今から5年ほど前、前回の予言の儀式では、唐突で思いがけない予言にエリュクフィルの人々は度肝を抜かれた。
曰く、エリュクフィルの地にまもなく本物の『魔王』が誕生する、と。
以来この街は、次の新たな魔王を歓迎するかのように、空前の魔王ブームとなっている。
「はぁ～、今度はどんな魔王様なのかしら……」
理想の魔王を想像し、トリップしているミルの様子に、アカネとキララは呆れている。
この地では様々な伝説として語られている魔王。女の子が一度は白馬の王子様に憧れるように、この地の女の子達は魔王に憧れる。
この土地の出身ではないアカネには、いまいちピンとこない話であった。
「ねぇミル、ここの街の『魔王伝説』って、いくつくらいあるの？」
「ん～、細かい伝説っぽい話を合わせるといっぱいあるみたいなんだけど、詳しくは知らない。なんていうか、『準魔王伝説』ってやつ？　あたしとしては、それは認めてないんだけど」
「じゃあ、ミルの認めてる魔王伝説は？」
「それは二つだけ。これはアカネも知ってると思うんだけど、『琥珀の魔王』と『蘇芳の魔王』の伝説よ」
その物語は、アカネも聞いたことがあった。
「『琥珀の魔王』は、たしかこのエリュクフィルの街の創設者の人だよね」
「そうそう。そして『蘇芳の魔王』は、魔族を率いて神の使徒イシ

ュチェルと戦った、史上最悪の魔王よ」
魔王という人物には、善人もいれば悪人もいる。何かしらの力に秀でていて、その時代に大きな影響を与えた人物が、後に魔王となり伝説として伝えられている。
「『蘇芳の魔王』の伝説は、私の実家の、ミルミギアの方でも伝えられているわ。でも、この街の伝説とはずいぶん違うみたいなんだけど……」
「そうなの？」
「ええ。だから、この街では『蘇芳の魔王』の印象があまりにも悪いから、初めてその話を聞いた時は本当に驚いたわ」
「そうなんだ。でもね、この街でも『蘇芳の魔王』のイメージは、5年前からガラリと変わったのよ」
力強く言い切るミルを、アカネは少しだけ不思議に思った。
と、アカネ達の背後にやってきた一人の男が、二人の会話に割り込んだ。
「ミルが好きな魔王って、両方とも国立劇場で舞台化されたやつだろ」
図星を指され、ミルは思わず閉口した。
「ミルは二つとも見に行ったんだ」
その男は、ミルに向けて意地悪な笑みを浮かべていた。
「フィベル、余計なことは言わなくいいの！」
ミルは拗ねた様子でその男に、フィベルという名の男に怒りをぶつけた。彼はクスクスと笑いながら、アカネ達の向かいの席に腰を下ろした。
テーブルの上に居座る白鴒獣（はくれいじゅう）は、獣でありながら、まるで人間のように、苦虫を噛み潰したように嫌そうな表情をしてその男を睨みつけていた。
黒目黒髪の男。傍目には、優しそうな顔をした好青年。
このフィベルのことが、キララは大嫌いで仕方がなかった。

2―（2）

学校ではいろいろな噂のあるアカネ。積極的に近づこうとする男はいなかった。

その中で、この男だけは違った。

アカネ達とはクラスも学科も違う。ただ週に一度の薬学の授業では、アカネ達と一緒になる。その後の昼休み、いつもアカネはミルと二人で食事をとるのだが、毎週この時間だけはフィベルも一緒に昼食をとっていた。

物好きな男だ。周囲の者は、口を揃えてそう話す。

だが、それ以外の面でフィベルの評判は非常に良い。容姿端麗で成績も良い。何より人当たりの良い性格をしているから人気が高い。それがかえって、アカネに嫉妬の目を向けさせていることを、当の本人達は気づいていない。

問題なのは、アカネがそれを満更でもないと感じていることだった。

フィベルが「いただきます」と言って食べ始めたのを見て、アカネもごはんを食べ始めた。アカネは今の今まで、ごはんに手をつけていなかった。フィベルのことをずっと待っていた。

「アカネ、もう冷めちゃってるじゃない。こんなやつ待ってないで、先に食べちゃえば良かったのに」

「こんなやつとは失礼だな。でも、僕のことは待たなくてもいいよ」

二人にそう言われ、アカネは曖昧な顔で頷いた。

「それにその肉炒め、キララが食べちゃってほとんどピーマンしか残ってないし」

?ピーマンは〜、苦くて嫌い〜?

キララは次に、ミルからデザートの果物をもらって食べている。

「その、白鴿獣って言ったっけ？　あれから、僕なりに少し調べて

みたんだけど」
「おお、さすが優等生。どうだったの？」
嬉しそうに聞き返すのはミル。
チラリと、フィベルがアカネを見たことをキララは見逃さなかった。相変わらずアカネはいつもの笑顔で話を聞いている。
「やっぱり最近の図鑑には全然載ってないみたいだね。でも、古い百科事典の方には、いくつか記述があったよ。挿絵付きで、およそ二百年前には絶滅したって書いてあった」
「うわ～、やっぱりそうなんだ。アカネ、こいつは高く売れそうだぞ」
ミルの一言に、キララはギクリと背に寒いものを感じた。ミルの目が、本気だったように思う。
「売らないってば」
「ペット屋とか、闇市に売るより、今なら国へ売った方が高くなると思うよ」
そんなことを言うフィベルを、キララはキッと赤い小さな瞳で睨みつけた。睨まれて、少し怯んでしまった様子のフィベル。
「と、ともかく、この白鴿獣が最後の一匹ってことはないはずだから、きっと森でひっそりと生き延びていたんだろうね。奥まで行けば、白鴿獣の集落が見つかるかもしれない」
「じゃあ、キララが悪人の手に渡った場合、白鴿獣が生き延びていたことが世間に知れて、密猟者達が一気に森に殺到する……」
ミルの発言に、キララはドキリと嫌な汗をかく。
「いや、そうなる前に、国の動物保護団体が動くと思うよ。いくら白鴿獣が、教会から悪魔の烙印を押されているとは言っても、それとこれとは話が別だからね」
「教会の聖書の方には、どういった記述があったの？」
アカネの質問には、フィベルは少し笑みを見せて答えた。
「聖書に白鴿獣が登場するのは、およそ千七百年前の史実からだね。イシュチェル教会の創設と『蘇芳の魔王』との『聖戦』がおよそ二

千年前だから、割と昔から白鴒獣は歴史に出てきている。なんでも、当時の人々は、白鴒獣を『蘇芳の魔王』の加護を受けた動物として恐れていたらしい」
「『蘇芳の魔王』の加護……」
「この赤い目なんかが、そうなのかな？」
ミルがキララの赤い円らな瞳を指差した。
「それも原因の一つみたいだね。『蘇芳の魔王』とは、文字通りそんな赤い目と髪をした人物だったらしいから。歴史書にも、そういう絵で描かれてるだろ？」
アカネ達の使う歴史の教科書、最初の挿絵のページにはカラーで大きくイシュチェルと『蘇芳の魔王』の戦いの様子が描かれている。これは宗主国であるこの国のリーゼ大聖堂の壁画を模写したもので、宗主リーゼ・イシュチェルの死後、大聖堂建設に伴い描かれたものである。普段は、一般人は見ることができないが、年に一度この祭の季節にだけ公開されている。
「『蘇芳の魔王』率いる魔族と、リーゼ・イシュチェルの『聖戦』だよね。最後には、イシュチェルが大津波を引き起こして魔族の集団を退けたったいう」
この戦いの詳細はイシュチェル教会の聖書にも記述されており、この国に住まう者にとっては子守唄ように語り継がれてきた物語であり、有名な魔王伝説の一つである。
「そういえば、絵には凶悪そうな魔物がたくさん描かれてるけど、キララ達は載ってないね」
「大陸中を探してみても、この土地にしか住んでいないみたいだ。祖先の動物がいったい何なのか、何科の動物なのかについても、何もわかってないみたいだ。だから、生きた白鴒獣は専門家にしてみれば咽から手が出るほどほしいに違いないね」
魔物研のクレイグ教授達があの様子なのだ。白鴒獣を知っている者に見せることは非常に危険なようだ。
「出来るだけキララを他人に見せるのは、止した方がいい」

「そうしたいのは山々なんだけどね……」
ため息をついて、そんなアカネを気にも留めようとしないキララを、諦めた様子で頭を撫でていた。
「白鴿獣の出現が、『蘇芳の魔王』の時代以降だから、加護を受けて誕生した新たな魔物だと伝えられているみたいなんだ」
「セラドン達はもっと昔からいたの？」
ミルの問いに、フィベルは難しい顔で答える。
「セラドンや他の魔物は、『琥珀の魔王』の時代から伝えられているものが多いみたいだ。まぁ、『琥珀の魔王』の時代については、あまり多くの文献が残っていないから、それ以上のことは分からないんだけど」
セラドンに至っては、古い時代の地層から化石としても発掘されている。一万年近く前から姿を変えていない生きた化石として、その生態系は長く研究されている。
「そのあたりのことは、それとなく『魔王研』の先生方にも聞いてみたから、実際そうなんだと思う」
「あの……『琥珀の魔王』という人は、どんな人物だったの？　私はあまり知らないんだけど……」
アカネが少し恥ずかしそうにして質問をした。
「あ、そっか。アカネはここの出身じゃないんだよね」
思い出したように言うミル、フィベルもそれに続く。
「この街の子供は、子守唄の代わりに『琥珀の魔王』の伝説を聞いて育ったからなぁ。今さら、歴史の授業でやることもないし」
「ていうか、子供に聞かせれる程度のことしかわかっていないっていうのが現実だよね」
「私が知ってるのは、『琥珀の魔王』がこの街を造ったっていうことくらいなんだけど」
「その通り。皆わかってるのは、それだけだよ。このエリュクフィルの建国王、始祖皇帝。約三千年前、『琥珀の魔王』がこの地にやってくる前にもここには街があったらしいけど、この土地に国の基

礎を作り上げたのは『琥珀の魔王』なんだ。今も残ってる旧市街や水路の設計は、全て彼自身が設計したといわれている」
　その話もなんとなく聞いたことがあった。アカネが気になっていたところは、そういった話ではない。
「どうして、その人は『琥珀の魔王』と呼ばれているの？」
「一説には、この土地には珍しい琥珀色の肌をしていたともいわれている。でも、一般的に言われているのは、『琥珀の魔王』が持っていた杖だね」
「杖？」
「杖の先端には、魔力の源の大きな琥珀色の石が埋め込まれていたらしい」
「うん、子供の頃よく読んだ絵本の挿絵はいつもそれだった。その杖を掲げて、魔王様は奇跡を起こすの！」
　うっとりとミルは想像の世界に羽ばたいている。国立劇場の舞台を思い出しているらしい。そんなミルを見て、アカネは不思議そうに呟いた。
「魔族は恐れているのに、魔王には憧れるのね……」
　その言葉を聞いて、少しムッとした表情をするミル。それを見て、アカネは慌てて言った。
「いえ、ただ私が外から来た人間だから、そう思うだけなのかもしれないけど」
　そんなアカネを擁護するように、フィベルも賛同意見を述べる。
「そうだね、確かに矛盾してる。歴代の魔王の中には偉大な英雄も数多く存在するから、憧れるのも分かる気もするけど。ただ、この町の人間が魔族を恐れているのは、『魔族病』と『聖戦』のせいなんだ」
「聖戦？」
「うん。二千年前の教会の宗主イシュチェルと『蘇芳の魔王』の聖戦で、魔族は完全に悪役だしね。魔族の実在しない現代では、魔族＝病気っていうイメージのせいで、どう考えても悪者にしかならな

いよ。この街の年寄り達は特に魔族を毛嫌いしてる。ミルや若い子達が魔王に憧れるっていうのは、脚色された舞台や本のせいで、この街のメディアによるイメージ戦略にハマってるだけだよ」
「ミーハーなんだね……」
再び図星を指され、ミルは怒ったように言い返した。
「そ、そうよ！　ミーハーで何が悪いの？！　あたしはね、時代の最先端を常に目指してるのよ！」
ムキになって言い返してしまうのは、メディアの戦略に乗せられているという自覚があったからだろうか。そして、商人の娘としてのプライドがそれを認めるのが許せなかったからなのだろうか。
しばらくして、三人は昼食を食べ終わり、出入り口の横の食器返却口の人の列に並んだ。
「ところで、午後の実験に使う試料は持ってきた？」
「ええ。教科書に載ってるのならなんでもいいみたいだったから、前に裏の森に行った時に取ってきたの」
と、アカネはいつもの山歩き用の鞄をポンと叩いた。ちなみに、移動中はいつもその鞄の中に身を寄せているキララは、？ギャッ！？と小さく身を震わせた。
「資料集には図が載っていない花だったのだけど、魔術用の薬草には違いないから。また先生に聞いてみようかなって」
「アカネはまたそれだなぁ。山をどこまで歩いていってるんだ？深く行き過ぎると、帰って来れなくなるぞ」
「大丈夫。地形図に載っていない山の奥までは行かないし、地質のルートマップを作りながらだから」
裏の山の森深くは、方位磁針も利かない未踏の地。軽装の学生が簡単に進めるような地形ではないし、凶暴な動物達も多い。興味はあるのだが一学生身分の彼女としては問題を起こすわけにもいかないので、できるだけ地図から離れた遠くには進まないようにしている。
と、アカネとフィベルが振り返ると、ポカンと立ち尽くすミルの

姿があった。
「ミル、まさか……」
「アカネ、これ後任せた！　今から収穫してくる！」
アカネに返却トレイを押し付けて、ミルは駆け出した。
「ミル、それはせめて収穫じゃなくて、採取と言ってくれ」
「教科書に載ってる薬草を取ってくるんだよ」
フィベルの冷静な声と、アカネの的確なアドバイスを背に受けて、ミルは人混みの間に走り去った。
その後、食器を返却すると、二人は薬草学実験実習室へと向かった。
実習室には、すでに多くの生徒達が集っていた。各自の机の上には思い思いに集めてきた薬草が置いてある。地味な薬草から、匂いのきついハーブなど。中には派手で大きな花を手にする者もいる。
「実際に調合までするのか？」
「いや、今日は身近にどんなものがあるのか感じるためのものだから。具体的な調合は、もっと勉強してからだと思うよ」
二人も空いている席について、授業の教科書と持ってきた試料をそれぞれ鞄から取り出している。アカネの鞄からは、真っ先にキララが飛び出て、すぐ隣の席の生徒を驚かせている。
「フィベル、その薬草は」
「うん、『シアンの花』だよ」
フィベルが取り出したのは、先が蕾のようにふっくらと丸まった淡い空色の植物。他にも、この植物を持ってきている生徒が何人もいる。
学識名称は【莱晶花（らいしょうか）】、通称『シアンの花』と呼ばれる薬草の一種。
「この街で一番有名な薬草だからね。これといって珍しくもないけど、利用法は最も豊富にあるから、使いやすいかなって」
また、薬学の知識に乏しい者が、楽をする意味で無難にこの植物を持ってくる。苦笑いをするフィベルに、アカネはクスリと笑った。

「でも、この植物は、この蕾みたいなのが花なの？」
「……？」
アカネの言葉に、フィベルは首を捻る。
「街に咲いているのも、みんなこんな形だよ。これで花だって、これを採らせてくれた家政婦のおばちゃんも言ってたし」
「そう……」
アカネは曖昧に頷く。
「実は私、最近この花について、少し調べているのだけど……」
アカネが話しかけたところで、ざわざわとした教室の雰囲気がスッと変わった。先生がやってきたらしい。結局、ミルは開始には間に合わなかったようだ。
「それでは最初に、各自何の薬草を持ってきたのか見せてもらいますね」
と言って、やや白髪の目立つ女性教授は、端の生徒から順に試料を確認していく。やはり、『シアンの花』を持ってきた生徒が一番多いようだが、中には先生が首を捻る珍しい植物や、庶民では手の出せない高価なハーブを持つ生徒もいるようだ。
「それで、アカネはいったい何を持ってきたんだ？」
フィベルの言葉に頷いて、アカネは鞄から一輪の花を取り出した。
フィベルと同じ、空色をした美しい花。葉の形も同じ。
ただ決定的に違うのは、アカネのものは見事に花弁が開ききっているということ。
その花からは、蕾の『シアンの花』と同じで僅かな甘い香りだけを放っていた。決して派手な花ではない。しかし、どこか目の離せない、人の視線を引き付ける不思議な魔力を持つ花。周囲の席の生徒達も、興味深そうにその花を眺めていた。
「それは……」
「これが、『シアンの花』なのだと思う」
蕾ではなく、花。
街でも見かけない、図鑑にも載っていない、美しい本当の姿。

先生も気づいて、慌ててアカネの元にやってきた。
「こ、これは見事ですね！」
「先生、これが、『シアンの花』なのでしょうか？」
「そう。他の皆さんの持っている、普段見慣れたこの姿を花と認識している人が多いようですが、これは蕾の状態です。莱晶花『シアンの花』とは、そのほとんどが蕾の状態で成長を終える植物なのです」
特殊な生態系を持ち、花のように見えながら花としての機能を一切持たない植物。
「何のために花をつけるのかは、まだ分かっていないことなのですが、薬草として様々な効能を発揮するのは、この特殊な花の生態に関係すると言われています。花弁が開いているのは私も初めて見ましたが、かつての論文や報告書にはいくつもその事例が紹介されています。アカネさん、これをどこで見つけましたか？！」
先生の剣幕に、アカネは少し引いている。
アカネ自身、ここまで驚かれるとは思ってもみなかった。
「は、はい、裏の森の中で、いつものように調査をしている時に……」
「森の中ですか。花が咲くには、何かの条件があるのでしょうか」
授業用の教科書でさえ、『シアンの花』の姿は蕾として描かれている。よほどの専門家でないかぎり、花弁が開くことは知られていない。
「莱晶花は、通説では百年に一度咲く花として伝えられていて、センチュリープラントなどと呼ばれています」
もっとも、それを確かめた者は誰もいないのだけれど、と、先生は曖昧に言葉を濁す。
「今まで、花開くのを一度も見たことがなかったから、百年に一度というのも怪しいものですけど。アカネさん、後でもう少し詳しく、どこに咲いていたのか話して頂けますか？」
「は、はい」

アカネの返事に満足したように頷くと、まだ少し興奮した様子で、先生は再び他の生徒達の薬草を見てまわっていった。
「そんなに珍しいものだったなんて……」
アカネがボソリと呟いた。
「僕も初めて見たよ」
「でも私、森ではよく見かけるわ」
何気なくもらしたアカネの呟きに、フィベルは耳を疑う。
「……よく？」
聞き返すが、アカネは小さく頷くのみ。
わずかな沈黙が流れるが、その微妙な空気は、後ろからの突然の明るい声にかき消された。
「なになに？　その花がどーしたの？」
遅れて授業に紛れこんだミルだった。
「ミル、遅いよ」
「まぁまぁ、なんとか実習開始には間に合ったみたいだし」
「全然間に合ってないから」
先生がすごい顔でミルを睨んでいるようだが、彼女はあまり気にしていないようだった。
「で、その花は何？　『シアンの花』みたいな色してるけど」
「ミルも、『シアンの蕾』を持ってきたんだな」
フィベルがミルの手に持つものを指して、これ見よがしに蕾を強調する。
「え？！　これ、蕾なの？　花じゃなかったの？」
そんなミルにアカネは先ほどの先生の話を簡単に伝えていく。
その陰で、得意げに動く一つの白い影があった。
？ふっふっふっ！　お前達、人間はこの花のことを何もわかっちゃいない！？
机の上で胸を張っても、キララに注目するのは横にいたフィベルと、アカネの花を見ていた前の席にいた男子生徒だけ。
キララも、花弁が開いているものは滅多に見たことがない。

ただし、森の奥にないわけではない。
森に住む動物達は本能でこの植物の意味を理解しているが、白鴿獣達はそれを知識として伝えている。何も解っていないのは、街に住む人間達のみ。
？俺が本当の使い方ってものを教えてやる！？
キララは、ミルの手に握る『シアンの蕾』をパクッと口に咥えた。
「あ……」
声を上げたのは、それを見ていたフィベル。ミルが気づく時には、手には茎しか残っていなかった。
「あー！　コイツ、あたしが苦労して見つけてきたものを！」
口の中でムシャムシャと租借する。
そして。
「ミル、待て！」
キララに掴みかかろうとするのを、フィベルが慌てて静止した。
アカネは慌てて、キララを捕まえようとした。
その次の瞬間。
キララの口からは、静かな火炎が飛び出した。
「あっつっ！！」
悲鳴を上げたのは、前の席にいた男子生徒。その生徒の毛先を焦がして、その激しい炎は瞬く間に消えた。
教室は沈黙に包まれる。
遠くにいた先生も何事かと、こちらの様子を伺っている。
皆、アカネが口を抑え、抱え込むようにして捕まえている白鴿獣を凝視していた。
「キララが……」
「火を吹いた……」
ミルとフィベルも茫然と呟いた。
アカネの腕の中でもがく白鴿獣、その姿はまるで小さなセラドンのようであった。

2―（3）

「つまり、あのセラドンはシアンの花を食べていたのよ！」
自信満々といった様子でミルは話した。
「そんなに単純な話なのか？　あれだけ厳重に管理された環境なんだから、別の食べ物を与えていたら研究員が気づくと思うけど」
興奮したように話すミルに対し、やや冷静にフィベルは答えた。
食べるだけで発火するような危険な薬草であれば、人間が火を吹いていてもおかしくはない。しかし、いくら研究しても人には火を出すことも花を咲かせることもできなかった。シアンの花を他の薬草と混ぜ合わせることで、人は初めて有効な利用価値に気が付いた。
「確かに、調合の仕方によっては火薬のように使うこともできるけど」
かつての人は経験と試行を繰り返すことで利用法を見出してきたが、その過程でどのような科学反応が生じているのかは未だ解明されていない。頭を悩ませている理学研究者達を余所に、工業的な利用は一途に拡大している。
？まだまだだな～、人間達は？
唯一、その秘められた力を知る白鴿獣として、キララはミルの頭の上で胸を張っている。
「このどこにでも生えてる雑草に、そんな力があったとは」
「雑草って……」
ミルの物言いに、フィベルは呆れている。
「街のどこにでも生えてるんだから、雑草に違いないでしょ？」
「まぁ、特別栽培しなくても生えてくるって意味では、雑草には違いないんだけど。ただ、どこにでも生えるというわけではないんだよな」

「どういうこと？」
「『シアンの花』は、この地域一帯でのみ生育する植物なんだよ。他の国では、栽培しても育たないらしい」
エリュクフィルの街では珍しくもなんともない植物だが、他国では種や苗を移植しても全く成長しない。
「風土が合わないのか、気候が合わないのか。エリュクフィルと同じ気温・降水量の土地で、研究用にこの国の土ごと移植して栽培したこともあったらしいんだけど、それでも成長しなかったらしい。一説には蕾の部分に魔力を溜めていて、魔力の存在しない他の土地では育たないと言われているけど」
「つまり、この国の特産品ってわけね」
「ミル、この『シアンの花』で儲けようと思っても、それはまだ無理だから」
フィベルに思考を読まれ、ミルは小さく舌打ちする。
「ミルみたいに儲けようと考える人はたくさんいるよ。でも、生育環境が解明されていない植物なんだから、簡単に工業栽培するなんてできないよ。ただでさえ、センチュリープラントとか呼ばれてて成長の遅い植物なんだから」
雑草のように、気がつけば街の到る所で見かける植物だが、いざ栽培しようとすると非常に時間のかかる気難しい植物である。
「それで、この後はいったいどこに行くの？」
「……知らずについて来たのか」
呆れてフィベルは呟いた。
二人が今いるのは、エリュクフィル魔法学校の端、樹海の畔とも言える場所に建てられた小さな研究棟の前。アカネが所属する『エーテル魔法元素測定総合研究センター』、通称『魔力研』の入り口である。後に増設された建物であるため、学校本体の荘厳な造りとはややギャップのある簡素な建物である。
「アカネがその『シアンの花』の群生している場所を知りたいっていうから。俺の知ってるとっておきの場所を、この後案内してあげ

るつもりなんだ」
「とっておきの場所ねぇ～……もしかして、あたしってお邪魔だったりする？」
「いや、構わないよ。どうせ他にも、お邪魔虫はついてくるようだし」
と、キララは、フィベルがちらりと自分を見たような気がした。
「それって、今アカネの研究室を見学してる、リッター博士のこと？」
「そうだよ。博士のことをお邪魔虫とか言っちゃマズイけど」
？ミル、チクってやるんだ！？
キララはそう思うが、ミルもそこまで性格は悪くない。
「リッター博士も、もの好きだよね。こんな寂れたとこ見学に来るなんてさ」
「ミル、陰口は良くないぞ」
「陰口じゃないよ。アカネの前でも言ってるから」
「余計に悪い」
アカネの研究室は非常に人気のないところで、研究員は教授が一名、学生はアカネを含めて二人しかいない。フィベルとミルは入口で立ち話をしているが、他に出入りする人は全くいなかった。
「人気がないだけじゃなくって、この研究室に来た人には病気で倒れる人が多いから、呪われてるんじゃないかって」
「どこの噂だよ……」
「アカネ本人は、それも承知で楽しんでやってるみたいだし」
「ミルはここにしないのか？　研究室の配属、まだなんだろ？」
「う～ん。アカネがいるからねぇ、確かに楽と言えば楽なんだけど」
所属の研究室や論文テーマを友人で決めると、後でひどい目に会うことがある。結局のところ、自分に興味のある分野でなければ勉強は続かないものである。
「というか、あんまりアカネにおんぶに抱っこじゃ、いくらミルでも嫌われるぞ」

「にゃはは、それは大丈夫だって」
どこにそんな自信があるのか、ミルは笑って話す。
「たださ、あんまり名の売れてない研究室で研究続けても、それが実績に直結しないっていうか、就職に役に立たないというか」
「ミルは家業継ぐんだから、関係ないんじゃ……」
「甘い！　たとえ家業であっても、ライバルはいるし、名のある研究をして功績を残しておくべきだわ！」
「……つまり、優秀なご兄弟がいると」
「あのバカ兄貴には、絶対負けない！」
学校を卒業し、企業に就職するのであれば、当然名のある研究室の方がコネも強いし、学校からも優先的に優良企業を紹介してもらえる。ミルの家のように家業を継ぐ生徒は気楽なものだが、他の庶民派の生徒は論文のテーマ選びも必死である。ちなみに、アカネのように学歴のためではなく、研究のために入学をするという生徒は本当に少ない。
「じゃあ、家業のためにって言うなら、経済学の研究室なのか？」
「一応、そのつもりなんだけどねぇ～。どうもパッとしないっていうか。アカネみたいに、フィールド出る研究の方が楽しそうといえばそうなんだけど」
「やっぱりミルもアカネに影響されてるんじゃないか」
他の生徒達に比べて、アカネはとても楽しそうに研究を行っている。研究室への配属も、他の生徒達に比べて一年以上も早かった。
「アカネは研究そのものが入学の目的だったからねぇ。入ってからフラフラと迷ってるあたし達とは、年季が違うのよ」
「というか、ミルは早く決めないと論文が間に合わないぞ」
エリュクフィル魔法学校の卒業には、平常授業の単位に加え、研究論文の提出が義務付けられている。他の単位は足りているのに、研究論文がまとまらずに留年するという生徒は意外に多い。
「フィベルの『魔王研』はいいよね。なんと言っても、エリュクフィルの花形だし」

この地に残る魔王の文化を研究する『エリュクフィル歴史民族学研究室』、通称『魔王研』は生徒の中でも特に人気の高い研究室。考古学の研究は、この学校が最も力を入れている研究分野である。

エリュクフィルは、街の至る所に歴史的建造物を残す遺跡都市。街の基礎となる水路、街道、旧市街地、そして現在は魔法学校として使用されている旧エリュクフィル城、これらは全て今から三千年も前に『琥珀の魔王』によって設計された建築物である。そして、現在のエリュクフィル市街は、そんな遺跡の上に建てられている。市街の地下へと潜れば、そこには二層にも三層にもなる旧市街地の遺跡が残っている。

「フィベルも、トレジャーハンターとかになるの？」

「いや、そんな危険な職に付くつもりはないよ」

まるで迷宮のように巨大な地下遺跡は、古いものは三千年も昔のものであるため、地下に潜るのは非常に危険である。そのため、そんな地下遺跡に潜り、学術研究用の考古資料を探すトレジャーハンターという職業が存在する。

「夢があっていいじゃないの。男の子は皆、憧れるんじゃないの？」

「確かに憧れた時もあるけどね。現実は危険と隣合わせで、実入りもほとんどない、かなり割の合わない仕事だよ」

「一攫千金の夢もあるけど、まぁそうだよね。フィベルみたいな貴族様には、似合わないよね」

「……」

口を大にしてフィベルが言うことはないが、彼は高貴な貴族出身である。と、少なくともミルはそう考えている。本人はアカネがいる手前、あまりそういう話をしたくないのか、この手の話題になると途端に何も話さなくなる傾向がある。

「……ミル、いつもそう言ってるけど、なんで僕が貴族だって思うんだい？」

「あたしの大嫌いな貴族臭がするから」

「……」

直感だけだった。
「まぁ、うちみたいな成金貴族臭はもっと嫌いなんだけど。でも、フィベルのファミリーネームはヘルシエルだっけ？」
「そうだよ」
「そんな貴族は、聞いたことないんだけどなぁ」
ブツブツと呟くミルに、フィベルはため息をつきながら言う。
「……ともかく、僕は貴族じゃないよ」
「ふ～ん、そういうことにしといてあげる」
ミルは納得していない表情であったが、これ以上詮索する気はなかった。
しばらく二人は雑談を続け、キララが本気で眠くなってきた頃、ようやく建物の中からアカネとリッターが出てきた。
「やっと解放されたみたい」
最初、ミルやフィベルも一緒に研究室の中に入り、リッターとともにアカネの研究室を見学していた。しかし、途中からはリッターからの質問の嵐にアカネが答えるという構図になり、あまりの専門用語の多さについていけず根を上げて二人は外に出てきていた。もちろんキララも避難組。
「いや、解放ってことはないんじゃないかな？　アカネも自分の専門分野だし、今まで興味を持ってくれる人なんていなかっただろうしね」
疲れた表情のキララ達に対し、アカネとリッターは未だに生き生きとした目で話しながら歩いてくる。
「いやいや、この研究は実に素晴らしい！　これはすでに確立された理論と言える。なぜ世間に認められないのか不思議なくらいじゃ。アカネさん、逆境に負けずがんばりなさい」
「はい。ありがとうございます」
「僅かばかりではあるが、私も周りの凝り固まった研究者達に、よく宣伝しておくぞ」
リッター本人は僅かばかりというが、彼の功績・知名度ははかり

知れない。研究の推薦者として後ろ楯が付けば、これほど心強いことはない。アカネは改めて、深く頭を下げてお礼を述べた。
「ジジイの戯言じゃ、気にせんでおくれ。それで、この後はどこに連れていってくれるのじゃ？」
フィベルに目配せをして、アカネは答えた。
「はい。先ほどの話にも少し関係するのですが、魔力を最も内包している植物、莱晶花『シアンの花』の群生地があるという話なので、フィベルに、この彼に案内してもらう予定だったのですが」
こちらを見るリッターに、フィベルは頭を下げた。
「考古学『魔王研』のフィベルです。よろしくお願いします」
「ふぉっふぉっ！　すまんのぅ、せっかくのデートを邪魔してもうて」
ちっとも謝っている表情ではないとフィベルは思った。
「構いませんよ。お邪魔虫は他にもいますから」
と、横から言うミルは、頭の上のキララと共にニヤリと笑った。

フィベルによって案内された場所は、学校から西に向かって少し山を下った樹海の外れだった。なだらかな丘に囲まれたその場所は、一見すると遠くからでは見つけることができない秘密の花園。主要な街道からも遠く離れて、人間などの動物だけでなく虫達さえも立ち入ることを拒む秘境の楽園。
アカネ達が辿り着く頃には、空は真っ赤に染まっていた。
「すごい……」
誰とも知れず呟いたアカネの腕の中で、キララも人知れず感嘆の声をもらす。
？これはすごいなぁ！？
低い丘の向こうには日に染まる街並みが見えるが、決して向こうからは花を見ることはできない。そんな隔絶されたエリュクフィルの向こうには、琥珀色に染まる湖が見渡せる。
一面に空色の花畑が広がっていた。その全てが『シアンの蕾』、

花弁が開いているものは一本たりとも存在しない。しかし、咲き乱れる蕾が地上にもう一つの空を作り上げている。夕日を受けて、『シアンの花園』も赤く輝いているような錯覚を感じる。
我慢できなくなったように、ミルは花畑の中へ駆け出した。
「すっごーい！」
それに負けじとキララも続く。
?うひょ～！?
蕾を散らして、白い小さな影は地上の空を潜る。
「絶景じゃのぉ！」
リッターが、年を感じさせない軽い足取りで蕾を観察している。
「こんな花畑があるなんて……」
驚きに目を輝かせているアカネを横目に、フィベルは悩んでいた。いけ、男ならここで肩でも抱いて見せろ、いやここは邪魔者が多い、まだ責める時ではない。心の中で、本能と理性が葛藤している。
そろりそろりとアカネの後ろから手を伸ばす。しかし、肩に手が届く前にアカネは歩きだしてしまった。
「フィベル」
伸ばした手をさっと隠して、慌ててアカネに答える。
「な、なに？」
「あの建物は何？」
振り返ったアカネが指差す先には、レンガ造りの小さな建物があった。
「教会、かな……？」
悩むようにして彼は答えた。
「教会？」
「元は古い、いつ建てられたのかも分らない小さな教会。それを改装して、修繕して、人が住めるようにした建物。教会としても一応使えるけど。まぁ、とある貴族の別荘みたいなものだよ」
「フィベルの家の物なの？」
「いや、違うよ。後ろ盾になってくれていた貴族に、借りていただ

けだよ」
花畑の淵に建てられた小さな教会。懐かしそうに見つめながらフィベルは話す。
「あそこには昔、僕の母が住んでたんだ。僕が幼い頃に亡くなったけどね。『シアンの花』が好きだったらしい」
「そう……」
アカネは曖昧に頷いた。
ミルは「わっふー！」と花畑に寝転がっている。その彼女のお腹の上でキララがぴょんぴょん跳ねまわっている。
「大丈夫、かな……」
ふと呟いたアカネに、フィベルは聞き返した。
「何が？」
「私が調べたものの中で、『シアンの花』が一番魔力が強かった。それが事実なら、ミル達が病気にならないか心配で」
魔力過剰摂取による『魔族病』。しかし、病気と魔力の関連性は現在のところ何も解明されていない。古くから云われている迷信のようなもの。
「大丈夫なんじゃないかな？　ミルは少し前に『魔族病』やったばかりみたいだし。それに、僕は昔からここで遊んできたけど、一度も病気になったことはないよ」
「そうなんだ」
頷いて、アカネは悩みながら一つの質問をした。
「フィベル。お母様が亡くなったのは、ひょっとして『魔族病』なの？」
「……？　いや、違うよ。母は体が弱かったって聞いてる。それに、『魔族病』じゃなくって、アカネみたいに元々瞳が赤い人だったんだよ」
アカネは驚いて、フィベルを見上げた。
「私と同じ、南の出身の方だったの？」
「それは知らない。少なくとも、この国の出身ではなかったみたい

だけど」
「そう……」
アカネは『シアンの花』を一輪手に取ると、静かに話し始めた。
「私の母は、『魔族病』で亡くなったの」
フィベルは驚いた。
「ミルミギアにも、大陸の南にも『魔族病』があるのか？」
「ううん、違うわ。母は、この国で魔法の研究をしていたの」
「ひょっとして……」
「ええ。昔、『魔力研』で働いていたの。魔力測定器の開発に携わったと聞いているわ。私の母は、この花に殺されたのかもしれない」
複雑な表情で、『シアンの花』を見つめる。
「それじゃあ、アカネがこの国に来たのって……」
悲しそうな顔をするフィベルを見て、アカネは微笑を浮かべながら答えた。
「違うわ。原因を突き止めたいとか、この花に復讐したいとかは思ってない。ただ、私は知りたいの。母をそこまで夢中にさせた『魔法』とは、いったい何なのか……」
魔法とは、魔力とは何なのか。どうして魔族は消えてしまったのか。魔王とはいったい何者なのか。それは全ての科学者・研究者が追い求める究極の問い。
「その手がかりが、この大地であり、この花なの」
空色の小さな蕾の中には、魔王へと続くカギが握られている。
「今なら分かる。どうして母が、あんなに楽しそうに研究していたのか」
アカネの母は、アカネと同じ赤い美しい髪をしていて、この国ではアカネ同様に街の人に忌み嫌われながらも夢中で研究を行ってきた。学校の、当時の母を知る教授達は皆口を揃えてこう話す。惜しい人を亡くした、キミの姿や志はお母さんと瓜二つだ、と。
「そっか……」
ただ頷くしかなった。

「すごいな、アカネは……」
少しだけ、彼女との距離を感じてしまい、フィベルは自分に鞭を打ってがんばろうと思った。
直面する問題に、いつまでも逃げているわけにはいかない。
花畑の中にいるミルは、キララの首根っこを捕まえて「火炎放射機ー！　いえ～い！」と蕾を食べさせて火を吹かせている。残り少ない白髪を燃やされながらも「これはすごい！　歴史的発見じゃあ！」とリッターは目の色を変えて白鴿獣を観察している。
「あれって、いったい何なんだろうな……」
「……なに？」
「いや……キララって、すごく頭いいよな」
「そうね。まるで、私達の言葉が分かるみたい。セラドン達も、あの子みたいに頭がいいのかな」
二人は火を吐く小さな魔物を見つめる。
大陸中でこの地にしか存在しない魔法文明。この土地でしか生育しないシアンの花。そして、魔王へと続くもう一つの手がかりである、この地にのみ生息する魔物達。
「僕には……」
フィベルの呟きは、ミルの叫び声によってかき消される。
「きゃ～！　こいつ、アタシの髪燃やしやがった！」
「……それはミルが悪いよ」
呆れながらアカネはミル達の方へと近づく。
アカネと入れ替わりに、花畑の外側へと飛び出してきた白い影。
？イ～ッだ！　ミルのバーカバーカ！！？
フィベルのすぐ隣にやってきたキララは、ミルを睨みつけて挑発するように尻尾を振っている。
その彼を、フィベルはジッと見つめた。
ひどく頭痛がするようだった。曖昧にしか感じられなかったそれは、ここに来てますますはっきりと感じ取れるようになった。体中に毒が巡るようだった。身体の奥が熱くなり、血が全身に熱を伝え、

視界が霞むように現実と幻想の世界が重なる。
この感覚には馴染みがある。
熱に浮かされているような症状。
魔族病。
その前兆のような微熱。
ふわりと風が舞うと、まるで熱風が頬を撫ぜるように、視界が蜃気楼のように揺らめいた。
そんな中で、ただ一つだけはっきりと浮かび上がる存在がある。
空耳ではない、確かなものが感じられた。
フィベルは、キララの首根っこを掴み上げた。
?おりょ?！?
痛みはないのか、驚いてキョトンとしている様子だったが、フィベルに掴まれていることに気付いて慌てて暴れ出す。
?なんだよ?！　離せ、離せ～っ！?
ジタバタと手足を動かすキララを見て、フィベルはまた頭を抱えた。
「最初は、気のせいだと思った……」
フィベルはそれを知るために、アカネへと教えるためでなく自分のために、それについて調べ尽くした。しかし、そんな記述はどこにもいっさい存在しない。
ここにきてようやく、キララはフィベルの視線に気が付いた。キララを見つめている。目が据わっている。さすがのキララも、その異常な光景に言葉を失う。
フィベルのその目は、ただの動物へと注がれる視線ではなかった。
?な、なんだよ……?
ため息をつくように、フィベルは言った。
「お前、いったい何者なんだ……?」
キララがそれを理解するのには、少し時間が必要だった。
?……は??
まさかという思いで、内心は動揺して冷や汗をだらだらと流しな

がら、それでもキララは彼を見つめ続けた。
その動揺も、呟きも、全て分かっているというように、もう一度フィベルはキララに向けて、白鴿獣に向けて言葉を投げかけた。
「白鴿獣とは、いったい何者なんだ？　なぜ……」
自問するように、フィベルは言い直した。
「なぜ、僕にはお前の声が聞こえるんだ？」
キララは、サーッと血の気が引いていくのを感じた。白銀の体毛に全身覆われていても、その変化が分かるほどに表情は暗く沈んでいった。
遠くに聞こえるアカネやミルの明るい声が、まるで華を咲かせるように、蕾しかないシアンの花畑の中に響いていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3946u/

アカネ色の魔王

2011年7月24日03時16分発行